

# イエール・レポートの カレッジ財政的観点からする解釈

## The Yale Report of 1828, Interpreted from the Point of View of College Finance

立川 明 TACHIKAWA, Akira

● 国際基督教大学 International Christian University



イエール・レポート, 大学財政, 優れた教育, 精神陶冶, 古典教育

Yale Report, College Finance, Superior Education, Mental Discipline, Classics Education

### ABSTRACT

The Yale Report of 1828 has been discussed and interpreted largely in terms of college curriculum, regardless of whether students of the subject have charged the report for its conservatism or otherwise. The present author argues that the Report in fact tried to reconcile traditional college education and its need for the basic training of the sons of merchants, mechanics, and farmers, in view of the prospective financial contributions from these classes. With the disestablishment of the church in Connecticut, Yale College lost prospects of munificence from the State which strained the College's finance in the 1820s. By emphasizing the education of basic principles of science, the Report, especially its First Part, rendered that education indispensable for the active classes, preparing unknowingly a new system for the support of a large, private research university in the United States.

## はじめに

数あるアメリカ合衆国の高等教育史上の文書の中で、1828年のイエイル・レポート（以下レポートと略称する）は、特別な位置を占めている。独立宣言からほぼ半世紀を経て、またエマソンの『アメリカの学者』に約十年先んじて公表されたレポートは、カレッジというアメリカ的制度の独立宣言でもあった。そうした文書の常であるが、過ぐる半世紀の間にも歴史家たちは、レポートが書かれた意図やその歴史的な役割について、互いに対立する解釈を提出してきた。<sup>1)</sup> アメリカ大学史家として著名な F. ルードルフや、近年のレポート論の草分けの M. ユーロフスキーは、科学技術と民主主義の時代に、古典中心の貴族的な教育を反動的に擁護した文書としてレポートを位置づける。<sup>2)</sup> これに対して D. スローンや J. レインは、レポートが近代大学の到来を前提として、カレッジに固有な役割を明確化した点、またビジネス時代の社会に有用なカレッジでの基礎訓練を提唱した点を指摘して、レポートに進歩的な側面を認めようとする。<sup>3)</sup> 本論文では筆者は、前二者とは違う観点、すなわちレポートの主眼は、財政面での支持者の拡大あるいは交代を促進して、カレッジ教育の存続をはかる点にある、という観点から、レポートの主な論点を網羅した第一部を分析する。そのため、本論に続いて、当時のイエイルの学長ジェレマイア・デイの著した第一部の試訳を掲載する。テキストには“Original Papers in relation to a course of liberal education. The American Journal of Science and Arts, 15, 1829, pp. 298- 324”を用いた。試訳にはパラグラフごとに[ ]を付した番号をつけた。本論文での参照は、断わりのない限りこの番号によった。歴史的な史料を駆使した論文については、将来を期したい。なお、来年度の公表を目処に、第二部の翻訳と解釈とを準備中である。

まずイエイル・レポートの出自を簡単に記しておく。1820年代後半の合衆国では、アンドリュー・ジャクソンが大統領に当選し、大衆の民主主義が定着した。レポートの著者には、合衆国の富はこの時代、商工業者に集中し始めたと見えた。

他方、当時のカレッジは、その規模、教育方針、経営方針のどれについても旧態依然と見られていた。最大規模であったイエイルも、神学、法学、医学の学生たちを含め、総計五百名以下の小規模校だった。<sup>4)</sup> 一方、1824年にはニューヨークのレンセレー工業大学が創設され、また1825年には神学部抜きの本格的な大学（ヴァージニア）も開学した。こうした中、イエイルの一理事が、同カレッジでの古典語の近代的な科目による代替を提起した。理事会からの委任の下、この提起に応じて教授団の創意として書かれ、後にベンジャミン・シリマン教授の『アメリカ科学・技芸ジャーナル』の1829年号に公表されたのが、「イエイル・カレッジにおける教育課程にかんする諸報告」、通称イエイル・レポートである。

その正式名称から伺えるように、レポートは実際には三部から構成されている。デイによるカレッジ論である第一部、キングスレイによる古典教育の擁護論である第二部、そして前二部に同意した理事会による短い第三部である。中でも第一部は、イエイル批判に対して、カレッジ教育の目標から始め、カリキュラムや教授法、学生の管理までを詳述した体系的な応答であり、レポートの中核をなす。本論はまず、その簡単な要約を行い、ついでレポートの代表的な解釈を批判的に検討する。最後に、カレッジの財政構造の転換という観点から、レポートの特徴的な主張と、その歴史的な意義を明らかにしようと試みる。

## 第一部の概要

カレッジは変化しないとの批判に応え、レポートはその変化が常態で根本的だと述べる。しかし、批判を検討する必要は認める。そこで、まずカレッジ教育の目的を確認して、その具体化に必要な方法を説明する。カレッジ教育の目的は to LAY THE FOUNDATION of a SUPERIOR EDUCATION である。その達成には精神を陶冶し、知識を装備せねばならないが、このうち前者がより重要である。しかも精神の色々な能力をバランスよく、徹底的

に訓練する。若者が親の元をはなれ、独立への一歩を踏み出す時に行われる。

こうした目的の達成の手段として、カレジは講義と復唱を用いる。教授が前者を、チューターが後者を担うが、両者は科学と文芸の基礎を学生の身につけるのに役立つ。特に、チューターは個々の学生に目が届くように、担当面で工夫がなされている。

カレジの教育は諸原理の訓練に集中し、法、神学、医のみならず、農業、商業、工業の実務は扱わない。広い世界へ目を向ける力を養う。当時のアカデミーや実業学校等に比べて、カレジの教育は一見殺風景である。しかし、カレジは優れた教育の基礎を築く。諸実践の根底にあつて、組織化と根本的な改善には不可欠な諸理論を教える。しかも、労働者の実践と結合される時、諸理論は階級間の対立を克服する力ともなるのである。

だとすれば、カレジは四年間に、基礎を徹底的に学ばせるべきである。二年三年という短期間では、その教育は不完全となるが、しかしすべてを少しずつ学ばせる皮相な教育よりはましである。学生は興味と適性とは無関係に、同じ内容を学ぶべきか。カレジの諸科目は全ての基礎であり、若い学生は適性を決めるのには早すぎる。一方、カレジでは三年次以降には選択を設けているのである。

共和国である合衆国は、ヨーロッパのモデルを無批判に真似るのべきでない。しかし、そうする資金がカレジにないのも事実である。ドイツ大学を真似ても、カレジの必要は残る。そのためにも、諸原理の教育の水準を十分に保ち、アカデミーその他の機関とは一線を画し、自らの価値低下を防がねばならない。

足りない資金を、学生の水増しによって補うとの案もあるが、そうした成果は長続きしない。準備不足の学生の迎え入れには特に慎重であれ。数ではなくて、内容について競争すべきである。一般大衆の教育水準の向上、特に生産活動に従事する者たちに学問の訓練の機会を与えることは、アメリカの夢であり現実目標でもあるのである。

## イエシル・レポート反動論：ルードルフとユーロフスキー

E. ルードルフは、レポートは「旧秩序を擁護する古典的な文章」であるとするが、その理由はレポートが合衆国中において以前からくり返されていた主張を、当時の改革者に対抗して、強力に述べた点にある。すなわち数学や古典の重要さを訴えつつ、「優れた教育の基礎を築く」とした点である。しかも、実用的な科目は教えない。「優れた教育」は新興の富裕階級には特によいお手本となる。奔放な彼らの富を、社会に有意義な仕方を用いさせるためには、カレジ教育で彼らを訓致する必要がある。レポートはその基本的な方向性において貴族的だ、とルードルフは言う。<sup>155</sup> ルードルフの解釈は貴族主義を前提に据えれば堅実であるが、本論の結論で述べるように、レポートにとって新興階級がいかなる目論みの対象だったかについては、別な解釈の余地を大きく残している。

M. ユーロフスキーによれば、レポートがアメリカの独立期以来の批判にもかかわらず生き残る古典尊重の名残りである。その擁護するカリキュラムは、1636年時点でのハーヴァードのそれと大差ない。彼の批判は、レポートの冒頭を彷彿とさせる類いの批判である。<sup>156</sup> ユーロフスキーの批判は、古典中心の教育が固定された教材と人間の心理との本体を前提に据え、そうした教材を一定の仕方でマスターさせることが本物の教育としている点に向けられている。レポートも、そうした教え込みの教育であるという。すなわち、カレジ教育の目的を「優れた知識（ママ）の基礎を築くこと」に置き、その具体的化として、「精神の装備と陶冶（ママ）に言及する」という。<sup>157</sup> レポートは、こうした古典中心主義の権化として反動的である、と決めつけるのである。

ユーロフスキーの解釈を検討しよう。固定した知の体系を保持する保守主義という捉え方は、彼の引用の不正確さに反映している。まずは上記のように、「優れた教育」を「優れた知識」と誤記している。同じく「精神の陶冶と装備」という原文の順序を、「精神の装備と陶冶」と逆転して引用し

ている。教育と知識は同義でないが、より重要なのは装備と陶冶である。固定した知の体系の伝達を問題にすれば、今日のキャンオンを巡る論争に明らかかなように、装備がまず関心を引くのは当然である。ところが、レポートは、精神の陶冶と装備をこの順序で取りあげ、しかも陶冶のほうが「より重要であろう」と明言している。[8] レポートは知的遺産の伝達よりも、精神の諸能力の訓練の方を、遥かに重んじているのである。

ユーロフスキーはまた、レポートが平等主義による教育水準の低下を危惧している、という。しかし、レポートの反発は、他の諸学校と同じ内容をカレッジ教育にも強制しようという動きに対してである。カレッジ教育が、神学、法、医のみならず、商、工、農という職業の基礎としても、役立つと明言する。[55] 全ての階級の者たちにその恩恵を及ぼそうという。大学に限られたヨーロッパとは異なり、各州に最低でも一つは大学を設けようとも主張するのである。[37] ユーロフスキーの論点には再考が必要である。

### イェイル・レポート革新論：スローンとレイン

1960年代から70年代の初頭にまで及んだ大学紛争は、研究センターの大学の存在意義に正面から疑問を投げかけた。1971年にD.スローンの著した論文、「調和、渾沌、そしてコンセンサス」は正しくそうした背景からイェイル・レポートを分析している。すなわち、レポートが理想とし擁護しようとした教育とは正反対の体制を促進したアメリカの研究大学が、いまや根本的な批判をつきつけられ、反省を迫られたのである。19世紀初頭のカレッジ教育思想への回帰は自然である。研究大学化した以前の教育理想は何であつたのか。1971年の地点からは、1828年のレポートのどんな主張が浮き彫りにされるのか。レポートに幻想を抱くべきでない、それがスローンの回答である。

ルードルフとユーロフスキーには、カレッジから大学への脱却こそ高等教育の発展であるとの大前提がある。この前提に立てば、レポートはこうし

た発展に抵抗する保守的な文章と映りがちである。これに対して、1960年代における大学の非人間化の告発を経たスローンでは、そうした視角が逆転している。レポートがもつ、高等教育の非人間化への出発点としての側面に関心が向くのである。レポート当時のカレッジは、大覚醒や自然科学の台頭、ライシウムや各種の工業学校の出現などによって、様々揺さぶりをかけられながら、実は近代的な高等教育全体の中に、その固有の役割を徐々に模索していたと、スローンは主張する。精神陶冶と古典とを巧みに結合し論じているのも、高等教育の中でカレッジを孤立させない工夫である。カレッジを「より上位の教育」への準備機関として定義するレポートの論点はむしろ近代的で、トーマス・ジェファーソン、ヘンリー・タッパン、フランシス・ウェイランドといった斬新な改革者の論点と似ているというのである。<sup>48</sup>

スローンの論点を検討しよう。彼は、上記の点に関して、当時の改革者とレポートの立場は基本的には同じと見る。しかし、ジョンズ・ホプキンスのダニエル・コイト・ギルマン、スタンフォードのデイヴィッド・スター・ジョーダン、シカゴのウィリアム・レイニー・ハーバー等の後の時代の改革者に関してすぐに思い付く点であるが、カレッジの当面の役割を認めるというのと、カレッジに固有の永続的な役割を主張する、というのとは同じでない。19世紀後半から世紀転換期の改革者たちは、カレッジは過渡期的に大学入学前の二年間の教育を担当する機関でしかなく、将来は消滅して行くものと確信していた。<sup>49</sup> これに対してレポートは、カレッジしか果たし得ない固有な役割を主張するのである。

では、レポートと時代を共有した改革者たち、ジェファーソンやウェイランド、タッパン等は、カレッジの役割を便宜上認めていただけなのか、それとも、レポートと同じく、カレッジに固有の役割を認めていたのか。以下、重要な点にのみ言及して、簡潔に論じたい。ジェファーソンについては、彼の関心の中心は「ユニヴァーシティー」の設立であつて、「カレッジ」ではなかつた。<sup>50</sup> また、1810年代の教育論では、彼は教育を大きく三段階

にわけ、カレッジ教育はその内の第二段階に位置づけた。しかし、この段階の中ではカレッジにあえて具体的には言及しない一方で、中等学校は第三段階の学校への準備機能には限定しなかった。<sup>11</sup>この点で、主としてより高等な学校への準備機関として位置付けるスローンとの間には隔りがある。1842年のウェイランドのカレッジ改革論には、レポートとの共通点が少なくない。中でも、皮相的な訓練に警鐘を鳴らし、カレッジが徹底的な教育を目指すべきである、との論点では両者は酷似している。<sup>12</sup>しかし、ウェイランドとレポートには、両者の決定的な相違点を導くことになる、別な類似点もある。ウェイランドはカレッジの財政構造に着目する。公共的な教育機関としてのカレッジの教育費は安価に抑えられ、結果的にカレッジの教師は薄給に甘んじている。「安価なカレッジ」という通念を脱却するには、カレッジは社会に対してもっと「幅広い」貢献を果たし、その対価を求めるべきである。したがって、ウェイランドの議論では、上級学校への準備機関としてのカレッジは後退する。カレッジ自身が変身し、全階級に有用な訓練を取り込む「徹底した教育」をなすべきなのである。<sup>13</sup>実用的な教育を大胆に取り込む点で、ウェイランドの論はレポートの論とは大きく隔たり、両者の類似を指摘するスローンの主張とは矛盾する。

さて、スローンがレポートと共通する「もっとも啓発的な具体例」と看做した、ヘンリー・タッパンについて最後に触れよう。<sup>14</sup>ドイツ型の近代大学の最初の実践的な提唱者と言われるタッパンの関心は、当然にも大学の設立にある。急激な産業化を迎えた19世紀半ばの合衆国では、「カレッジ教育を必要としない」と自他共に認める実力者階層の台頭が著しかった。商・工階級は、カレッジを迂回しつつ、時代の先端の職業を実践した。したがって、タッパンによれば、カレッジの数を増大させることでその不振を解決することはできない。唯一の解決策は、極めて程度の高い大学をまず一校設立して、社会にたいするその圧倒的な役割を市民に納得させることである。その結果、準備機関としてのカレッジへの認識も、徐々に改善されることになろう。タッパンは、大学とカレッジは相補

的であると言う。確かに、カレッジなしに大学はありえない。しかし、「カレッジがその円熟した果実を見出しうるのは、大学においてのみである。(下線筆者)」<sup>15</sup>カレッジが直接にその意義を主張しても、社会の強力な部分からは無視されるだろう。大学を認めざるをえない社会から、間接的に支持を受ける以外にカレッジには方法はないというのである。

しかし、レポートは大学の予備教育のための機関としてのカレッジを提唱しているのだろうか。(この問いの前提は、レポートが公表された1828年の合衆国にはすでに大学が存在したということである。しかし、レポート自身、実績のみでなく、願望にも基づいて所見を展開している、と明言しているので、[48] ここではあくまで「論」として取りあげたい。) レポートは、カレッジでの訓練が当時の専門職、すなわち医、法、神学の「全てに共通な基礎を置く」と明言している。[22] 同様に、カレッジに特有な教育方針が実行可能な根拠を説明して、カレッジの教育は「専門職への準備に止まる」点を指摘する。[35] 応用分野へ次々と手を広げる必要がないのである。更に、仮定の問題として、もしイエールに附属する神学、医、法の三つの学校に哲学校が加われば、ドイツ的な大学の体裁を備えるに至るが、その場合もカレッジは明確な目的を持つ部門として存続する、と主張する。その目的とは「他の四つの学校全てへの準備となる諸分野を教えることである。」[38] こうした言及を見る限り、レポートがカレッジの役割の一つとして、専門職の訓練への準備を想定していたことは、間違いないといえるであろう。

にもかかわらず、レポートは、ドイツ的な大学が十分に配慮しなかった実業的な分野、すなわち商、工、農の分野への準備も強調した。専門職用の訓練の場合と同じく、カレッジの教育は商、工、農の分野の詳細も一切含まない。それら詳細は「その実践が行われる環境そのものの中を除いては、決して効果的には学べない」からである。ではカレッジは何をするのか。そうした「実践的な技芸を学ぶに先立ち、科学の諸原理の徹底した基礎を置く」のである。[25] しかもレポートは、科学

的な諸原理の実際問題への応用を必要とするのは、実践的な職業に携わる者たちに他ならないのと論じる。彼らこそ、「その置かれた状況や実業のゆえに、科学の諸原理を彼らの実践的な応用へと還元する絶好の機会をもつ階級」なのである。[55]

既存の専門職はともかく、商、工、農の分野での高度な訓練がほとんど存在しなかった1820年代、レポートはカレッジ教育をそうした分野への準備として位置付けている。商、工、農の分野では、カレッジでの訓練に続くのは、「置かれた状況や実業」であり、「環境そのものの中での」訓練である、とレポートは想定していたとすれば、レポートがカレッジを主として大学への準備機関としてとらえていたとするスローンの解釈は支持しがたい。商学、工学、農学等の学部、大学院が完備した現在から振り返れば、デイが実業部門の大学への組み込みをすでに前提に論じていたと解釈したい願望に、スローンならずとも、駆られる。しかし、後に述べる理由で、レポートは、既存の専門職とは比較にならない程専門的な訓練が不備であった商、工、農階級にとってのカレッジ教育の意義をこそ、強調したのである。この点との関連で、ジャック・C・レインの解釈には是非触れておきたい。1987年に公表した論文の中でレインは、レポートを反動的な文章とする見方を排して、それはむしろ新しい時代の要請への応答であると論じる。すなわち、有徳な市民を主役とする旧共和主義から、実利主義の経済人を主役とする新しい体制への移行を、カレッジ教育面から論じたのがレポートであって、この文書はいわば経済人のための教養教育の意義を論じた、新共和主義の宣言文だというのである。

注16

### 「より上位の教育」か「優れた教育」か

スローンの主張については、われわれ日本人は別な形で、具体的な問いを提出することができる。スローンの主張の中心は、レポートも、当時の大学改革者たちも、カレッジ教育を「専門職および大学院訓練への堅固な準備」として等しく認知していた、という点にある。注17 既述のようにレポート

は、カレッジ教育の目的を (to) LAY THE FOUNDATION of a SUPERIOR EDUCATION と定式化している。この文言は宮澤康人氏の訳では「より上位の教育のための基礎をきずくこと」となっている。注18 「上位の教育」は、スローンのいう「専門職および大学院訓練」にほぼ対応する。1828年当時の合衆国に、「大学院」がすでに存在していたか否かは明確ではないが、しかし1831年にはハーヴァードが早くもカレッジ卒業後のアカデミックな1年課程を設置したという。注19 レポート当時には、非公式にせよ、専門職向け訓練に加え、カレッジ後のアカデミックな訓練があったと想定してよいであろう。

レポートは、カレッジ教育の目的を「より上位の教育のための基礎をきずくこと」と規定したのである。宮澤訳には少なくとも二つの根拠がある。第一に、これまで検討したように、レポートが、専門職向け教育の「基礎をきずくこと」をカレッジ教育の目的の一部と看做していたことは間違いない。レポートは様々な個所で、カレッジ教育が専門職全てに共通な基礎を提供すること[22]、またイエイルが将来は哲学部を含む4つの専門学部を備える大学となれば、カレッジはこれら「すべてへの準備となる諸分野を教える」と述べているのである。[38] 第二に、superiorなる形容詞が、より上位の学校を表す語として慣用されていたことである。具体的には、例えば既述のタッパンは、フランスの高等教育を紹介した際、そのままフランス語で l'instruction superior を用いている。注20 こうした意味で、「より上位の教育」という宮澤訳には相当な根拠があるというべきである。

けれども、カレッジ教育の目的が「より上位の教育」への準備を含むことと、それが「より上位の教育」への基礎づくりに尽きることは、同じではない。では、a SUPERIOR EDUCATION を「より上位の教育」に限定すると、どのような問題点が生じるのだろうか。レポートの第一部が、専門職向け訓練の基礎としてのみ、カレッジ教育を提示しているのであれば、疑問は生じにくい。しかし既述のごとく、レポートはくり返し、カレッジ教育が商、工、農の階級にも有用な基礎訓練を与え

ると主張する。[25][55] ところで、これも既述の通り、商、工、農教育を「より上位の教育」と看做すことは、学校制度の面から見れば困難である。例えば、レンセレアー工業大学（1824年）での工業教育を、カレッジ教育と並ぶと見ることは不可能ではないが、しかし「より上位の教育」と考えることは難しい。同様に、1820年代に初めて体系的に農業教育を実施したのはライシウムであるが、これもカレッジ教育より「上位の教育」とは看做せないのである。<sup>21</sup> 更に、教育の内容に注目しても、レポートがそれぞれの実業の実際的な詳細より、そうした実業の根底をなす諸理論の方を上位と考えていたことが伺える。既定の作業には手先の熟練が役立つ。しかし、事業の計画や作業工程の新規化、さらには発明や発見は、「高度かつ体系的に涵養された精神の産物とならざるを得ない」のである。[27] レポートは、「より上位の教育」とはいえない実業教育の基礎訓練をも、カレッジが、担当すべきだと主張する。その目的は「より上位の教育のための基礎をきずく」ことには尽きないのである。

最後に、レポートは、「より上位の教育」あるいは職業とは無関係に、いわばカレッジ教育自体の意義を何か主張していないのだろうか。例えば、カレッジに続いて、「より上位の教育」を受けなければ、前者は柱や屋根や壁のない家の基礎工事のように、無用の長物となるのだろうか。「専門職向けの学校」に行かない者にもカレッジ教育は断然有用である、とレポートは主張する。何故なら、一度カレッジでの基礎訓練を受けた後には、人は大部分を「自力で学ぶであろう」からである。

書物の力や観察の手段を借りて、彼は絶え間なく知識を増大させようであろう。

意義のあるあらゆる話題について普遍性のある見解を身につけているので、彼はどこへ行こうと、誰と仲間になろうと、耳にする意見や討論を理解し、消化し、正しい意見を形成することができる。[21]

カレッジの教育は、専門職や実業に就かない者にも有用である。とすれば、a SUPERIOR EDUCATION は、「より上位の教育」と十分には対応しな

いであろう。

以上のような問題点を考慮するとき、a SUPERIOR EDUCATION は「より上位の教育」の他に、別な意味をも含む訳語が適切であると筆者は考える。周知の如く、superior には、「上位」に加えて、「優秀な」の意味がある。両者の意味内容には類似もあるが、「上位」の場合は「中位」や「下位」に対する場合のように、互いの位置関係を機械的に決定する傾向が強い。これに対し「優秀な」は、制度間の位置関係のように、容易に決めにくい質的な違いを含意している。レポートでの a SUPERIOR EDUCATION の訳語としては、「より上位の教育」も「優秀な教育」も共に満足とは言えない。上位と、質的な違いとを共に含む訳語としては「上等」があるが、しかし日常的な感覚から判断すると、品物の品質に付ける等級の意味合いが強く、教育の質としてのエクセレンスを十分に含意していない。そこで、ここではあえて「優れた」をあててみよう。すると、レポートのカレッジの教育観の特質に、更にはレポートのこれまでの諸解釈の問題点に、どのような光をあてることができるだろうか。

まず、レポートの中で a SUPERIOR EDUCATION がカレッジ教育の目的として言及される個所に注目しよう。ここではレポートは、基礎を置く作業は「親による監督に替る新たな監督が必要となる人生のある時点でこそなされるべき」であると述べる。[7] もし、カレッジの教育が「より上位の教育」への準備としてなされるのなら、何故に親元から離れる時というタイミングが必要なのだろうか。これより多少は遅くとも早くとも、決定的な差異はない。「より上位の教育」も、何年かのうちには終了してしまうのだから。ではレポートは何故、カレッジ教育がこうしたタイミングでこそ必要だと言うのだろうか。それは「より上位の教育」と違って、「優れた教育」は時間的にも、制度的にも制約を受けず、その反面として、時間にも制度にも決定的な援助を仰ぐことが出来るものではないからである。人は「優れた教育」を、職業を通してにせよ、社会活動を通してにせよ、生涯かけて達成せねばならない。しかも、社会の中にありながら、他人

に頼ることなく、自立してそうせねばならないのである。だとすれば、「優れた教育の基礎」は、親の庇護を離れるその時にこそ、置かれねばならないのであろう。この時こそは、生涯にわたる独立と自立への正しく第一歩であり、他のなん時とも替えがたいからである。

同じ個所では、a SUPERIOR EDUCATIONが a thorough education という表現に置き換えられている。しかも、それが更に a partial or superficial education と対比されている。不完全あるいは皮相な教育への基礎はいいかげんで済むが、しかし完璧なあるいは徹底した教育には「幅広く、深く、そして堅固な」基礎が不可欠だということである。[7] 「より上位の教育」を完璧なあるいは徹底した教育と同類項にくくるのは不可能ではないが、それを「不完全あるいは皮相な教育」と対比させるのは難しい。カテゴリーが違うのである。上下関係と質的な違いとを、レポートは意図的に混同しているが如くである。というのも、別な個所では superior は「より上位の」の意味で用いられている。例えば、ヨーロッパの専制諸政府が「a superior education から生ずる利点を二三の特権的な場に集中してきた」という場合では、それは「より上位の教育」「高等教育」の意味であろう。[37]

ところが、更に厄介なことに、レポートはカレッジ教育自体にも a superior education の表現を適用している。階級の別なく教育を広めることと、カレッジを他の諸学校と同レベルに下げることとは同じでないと論じ、レポートは「もしカレッジの学位が a superior education の保証でないとしたら」アカデミーの証書と大差なくなると主張する。[44] 更に続けて、近い将来諸カレッジは高度で堅固な学識への要求のみに応え、「second-rate education は程度の低い諸機関に」残しておけばよい、とも述べる。[50] 二流の教育がカレッジでの「優れた」教育と対比されていることは明らかである。イエイル・レポートは同じ a superior education に、種類の異なった二つの意義を付与して用いている。したがって、レポートの読者は、a SUPERIOR EDUCATIONが常に「より上位の教育」の意味では用いられていない点、またこの表現に、カレッジ、

専門職向けの学校、実業の現場などの位置の上下とは無関係な、質的に「優れた教育」という意味が強く込められている点に、十分な注意を払う必要がある。

## レポートのカレッジ財政的な解釈

カレッジ教育の目的が、「より上位の教育のための基礎」のみではなく、「優れた教育の基礎」を置くことも含むと理解することによって、前二節で指摘したカレッジ教育と商、工、農階級向けの訓練との関係は、どのように解釈し直されるであろうか。この点で筆者は、イエイル・レポートの意義を、当時の経済的な条件の中で説明するピーター・D・ホールの解釈が、示唆に富むと考える。ホールは何よりも、1828年前後の数十年にわたり、イエイルが置かれていた財政状況に注目するのである。<sup>註22</sup> 周知のように、19世紀の冒頭に至るまで、コネティカットは特定の宗派を公認していたが、1818年、他の諸州とならんでそうした体制の廃止に踏み切った。<sup>註23</sup> この結果として、会衆派は州との間で特権的な地位を保持できなくなり、同派に立つイエイルも州から援助を受ける根拠を喪失した。実際、1701年の創設以来、イエイルはほぼ一貫して公的な援助を受け続けたが、1820年代の後半を最後に、そうした補助は完全に停止してしまうのである。<sup>註24</sup> これ以降、カレッジは学生からの授業料・諸費および小さな基金からの果実に基づく経営を余儀無くされるのである。しかし、科学時代の到来もあって、小規模な財政での運営は益々困難となる。資金源を新たに開拓する必要に迫られる。ここにイエイルは、それまでの州への依存から、卒業生を中心に、私人からの寄付に頼るという、カレッジ財政の構造転換の端緒を開いたのである。これがイエイル・レポートの公表の時期に対応する、とホールは主張するのである。<sup>註25</sup>

詳細は将来に期したいが、創立から200年間のイエイルの財政上の大雑把な変化を、レポート前後に焦点を合わせて簡単に見ておきたい。表は1701年から1900年まで、イエイルが州および諸



年代	州の援助額	個人援助額	年代	州の援助額	個人援助額
1701-1720	8,055	6,974	1801-1820	8,785	8,000
1721-1740	11,653	16,514	1821-1830	7,000	93,512
1741-1760	12,432	1,542	1831-1840	0	138,138
1761-1780	6,337	2,502	1841-1860	0	560,940
1781-1800	40,629	5,813	1861-1880	0	2,730,136
			1881-1900	0	7,255,147

個人から受けた援助の額（ドル）を、20年単位で集計したものである。（但し、1821年から1840年の間は10年単位。）<sup>注26</sup> 18世紀を通して、州からの援助が大きかったことが知られる。しかし、19世紀に入り、1820年代（すなわちイエイル・レポートの時代）からは、個人による援助が支配的となってゆく。この転換期において、カレジが財政上の新たな工夫を強いられたであろうことは、容易に想像がつく。実際、イエイルは自ら銀行を経営し始めるが、1825年には早くも破綻を迎える。<sup>注27</sup> 当然にも、デイ時代のイエイルは財政上の大きな困難に直面する。彼の後継者セオドア・ウールゼイによれば、デイの任期（1817-1846）の中途にあたる1830年には、カレジの財政はほぼ破産状態となってしまったという。<sup>注28</sup> しかし、この年からイエイルの事情は好転する。1830年代の前半の基金集めは成功し、不振のプリンストンをしり目に、12万ドルを超える寄付を得る。この時から1846年の退任の年まで、デイのイエイルの財政は赤字知らずとなるのである。<sup>注29</sup>

ところで、カレジ教育論としてのみ見られがちなレポート自身、財政問題を不問に付してはいない。ヨーロッパの諸大学をみだりに模倣しない合衆国のカレジは、少なくとも州の数だけは必要だと述べて、教育機関の数とその分散の必要を主張しはする。しかし心配がないわけではない。最大の不安は財政であって、レポートは「合衆国での文芸の成長が弱々しく不十分なのは、公立教育機関の大多数に対する資産の提供がいかに乏しい結果」だ、と財政面での憤まんをあらわにするのである。[37] イェイル自身ドイツ大学をみだりに真似したいくないと述べるが、その理由は、教育文化上の違いに尽きない。「イエイル・カレジだけ

は、そうした模倣を実行する財源がない間は、ヨーロッパの諸大学の真似を試みるという馬鹿げた苦行から免れることを少なくとも願う」という。[38] 財源さえ確保できれば、いつでも真似る用意がある、と解釈されても不当でない。財政的な条件を根拠に現実的な選択肢を限定する、という論じ方は、ヴァージニア大学やロンドン大学と自校を比較する場合にも[38][45]、共通に観察することができる。唯一ヨーロッパの諸大学をモデルに開学したヴァージニア大学は、その開学に先立って「三十万ドルという出費を必要とした。この額は、イエイル・カレジが実に百二十五年の間に諸個人および州から得た援助金の合計を、遥かに上回るのである。」[38] 数十万ドルの資本を元に設立されたロンドン大学との比較は、更に率直である。「基金からの年間の歳入が二三千ドルでしかないカレジが、同時にロンドン大学のようなふりをしてよいものだろうか。」[45] これを要するに、デイはカレジの改革[非改革]を論じるにあたって、教育文化上の特質もさることながら、財政上の条件に相当な注意を払っているのである。

ではカレジの財政規模の拡大はどのように図ればよいか。一つの可能性は、学生数の増加である。数多くの学生からの授業料・諸費を集積して、財源の増大を図るのである。しかし、こうした試みは長続きしない、とデイは断定する。学生数の増加はカレジ教育の質の低下を招き、カレジは早晚アカデミーのレヴェルにまで凋落するだろうからである。近隣のアカデミーを置いて遠隔のカレジにわざわざ子弟を送る親はいなくなる。そうなれば、カレジの収入は元の状態より悪化さえしかねない。[46] カレジはその財源の拡大の方法には慎重であるべきである。合衆国は絶対的な財源不足

には無縁で、1820年代の繁栄は膨大な富の蓄積を結果しつつあった。しかし、デイにはそうした富の大部分は商、工、農階級の所有になると見えたのである。[55] だとすれば、カレジの採りうる有力な方策の一つは、今後こうした階級からの確実な支持も得て、自らの財政構造を堅固に確立して行くことである。そのためには商、工、農階級に対し、カレジ教育が彼らの子弟にとっても極めて有意義である点を、まずは説得せねばならない。「生産・流通にかかわる実業を目指す若者たちを・・・カレジから閉め出すべきではないのである。」[55] しかし、他方カレジは、商業、工業、農業学校になり下がることはできないし、そうすべきでもない。カレジはその得意な分野、すなわち科学と文芸の基礎教育に専念して、綿密な訓練を最も効率良く遂行する点で、アカデミーと区別される。[44] カレジはいわば、他の機関が容易には遂行しえない「優れた教育の基礎を置く」ことをその固有の職分とするのである。

最後に「優れた教育」の構造について一言述べたい。本稿は、レポートがカレジ教育の目的として「優れた教育の基礎を置く」ことも含めている、と主張するが、この目的こそがレポートの主張するカレジ教育の固有の存在意義であると解釈する。ところで、「固有の」と、優れた教育の「基礎」とは何を意味するのか、まず検討する必要がある。「固有の」については、仮に a SUPERIOR EDUCATION を「より上位の教育」とした場合に、その教育に対する直下の教育は確かにカレジ教育となるが、しかし、カレジ以前の学校教育も間接的には「より上位の教育」の基礎とはなるのではないか。したがって、カレジに固有の意義とは、それが「より上位の教育」に対し、質的にも重要な何かを付与する点に求めるべきであろう。この「何か」とは何であろうか。その一部は、社会の指導者として必要な人格の基礎であり、弁論その他の能力である。しかし「何か」はこれに尽きない。レポートが一層強調するのは、専門職や、特に近代の生産・交通様式の「隅の礎石」としての「科学の諸原理」である。[25] こうした「科学の諸原理」の徹底的な訓練は、カレジにとって固有な

職分である。しかもレポートが冒頭で言及する科学の諸分野 [4] は、いずれも 18 世紀以降に発展した近代の科学であって、そうした訓練は 19 世紀以降のカレジにとって、固有な職分であるとも言えるのである。こうした訓練を欠くならば、19 世紀以降の専門職ならびに商、工、農の職業は、古い慣習と勤を基礎とした旧態依然とした職業にすぎない。カレジの与える「科学の諸原理」の訓練に基づいて初めて、それら職業活動は近代国家としての合衆国に相応しい内実を獲得し、いわば近代のパイディアとしての「優れた教育」に変貌するのである。こうした基礎訓練は、カレジ以前の教育も、以後の教育も、共に与えることはできず、カレジは正しく「固有の役割」を担うのである。

## おわりに

その第一部を見る限り、1828年のイエイル・レポートの著者の元来の意図と、現代からみるその意義とは、次のようにまとめることができよう。レポートは確かに古典語の廃止と実用的な科目による代替という変革への提案を退け、伝統的なカレジ教育の継続の意義を強調する。しかしそれは古い教育論からする、新しい实用主義・企業家精神への単なる反発ではない。むしろ、イエイル・カレジは、改革への圧力をはねつけながらも、そうした圧力を生み出した 1820 年代の合衆国の主要な諸勢力、特に商、工、農階級に対して、カレジ教育が子弟の「優れた教育」に不可欠である点を展開する。この場合のカレジ教育の中核は、17 世紀以来発展し蓄積されてきた科学の諸原理であり、その徹底的な理解を基礎とせずしては、19 世紀の合衆国は、ひよわなポプラが満ちあふれるのみで、堂々たるニレの繁茂する堅固な国家とはなれない、と論じるのである。

けれども、1820 年代のイエイルは、構造的な財政難という深刻な問題に直面していた。公認の宗教を支える公的カレジとしての地位と、公的な財政援助とを失ない始めたのである。他のカレジと

同じく、イエイルにとっても、新たな財源の開拓と、新たな財政構造の確立とが死活問題であった。最有力な階級は、いうまでもなく新興の商、工、農階級であった。カレジの改革への圧力もそこから強かったのである。過去から受け継いだカレジのアイデンティティーを失うことなく、しかも新興階級にとってのカレジ教育の意義を十分に納得させること、そのことを通して、結果的には、カレジの財政構造をも転換すること、それがイエイル・レポートの元来の意図であり、また現代にとっての意義である。

近年、アリソン・ラビルは、イエイル・レポートの教育論は1820年代前後にはありふれたものであり、レポートが歴史に残ったのは、普及していた学術誌に公表されたため、後代の歴史家たちの目を引くからにすぎない、という実証的かつ論理的な結論を提出している。<sup>注30</sup>しかし、レポートを単なるカレジ教育論と見るのは的を射ていない。1828年のレポートのユニークな点は、個々の論点の独自さではなく、むしろ既知の常識を動員して、新しい目標を達成しようとした構成にあるのである。今日のわれわれが注目すべきは、そのカリキュラム論ではなく、レポートが想定した歴史の展開の予見であり、カレジ教育論を媒体とした、新旧の社会勢力との取り組み方である。

そうした眼をもって見ると、イエイル・レポートは、後にリチャード・ホフスタッターが進歩主義運動の基本図式として定式化した、相対的に地盤沈下しつつある旧中産階級による新興富裕階級の統制への努力、というスキームの萌芽をすでに持っている。<sup>注31</sup>しかも、第一部の結語の部分で、既存の教養階層が、新興富裕階級の資産の用途を、公にとって有益な方向へコントロールする必要性を述べており、[55] 更には、1828年のイエイルの努力は、やがてコントロールさえままならない強大な研究大学誕生の基盤作りに、恐らくは意図せずに、貢献しているかも知れないのである。高等教育史の限られた領域では、イエイル・レポートは何よりも、アメリカ合衆国における「私立大学」「私立カレジ」の誕生への先駆けの一つとして注目に値するのではないか。もともと、合衆国での私

立カレジの繁茂に決定的な役割を果たしたのは、1819年のダートマス・カレジ判決だとするのが定説である。<sup>注32</sup> ジョン・S・ホワイトヘッド以来の近年の議論も、主として法律問題として展開されている。<sup>注33</sup> これに対して、イエイル・レポートは、例えどれほど萌芽的であるにせよ、私立のカレジの出現の条件を、教育論と財政問題との関連の中で論じ、展開している。現代の大学の誕生の祖型の一つとして、興味深い研究対象たることを失わないであろう。

- 1 イエイル・レポートの公表された翌1829年4月には、*American Education Society Quarterly Register and Journal* Vol. I, pp. 204-209 が早くもその紹介を行ったが、レポートについての論争は今日まで続いている。
- 2 Frederick Rudolph. *The American College and University: A History*. The University of Georgia Press, 1990 (1962), p. 130; Melvin I. Urofsky. "Reforms and Response: The Yale Report of 1828." *History of Education Quarterly*, V-1 (March 1965), p. 64.
- 3 Douglas Sloan. "Harmony, Chaos, and Consensus: The American College Curriculum." *Teachers College Record*. LXXIII-2 (December 1971), p. 243; Jack C. Lane. "The Yale Report of 1828 and Liberal Education: A Neorepublican Manifesto." *History of Education Quarterly*, XXVII-3 (Fall 1987), p. 336.
- 4 *Catalogues of the Officers and Students in Yale College*, November, 1824. p. 21; November, 1825, P. 20; 1828-9, p.22 参照。
- 5 Rudolph. op. cit. pp. 132-34; イエイル・レポートが貴族的な過去を指向しているというのはルードルフの一貫した主張である。Frederick Rudolph, *Curriculum: A History of the American Undergraduate Course of Study Since 1636*. Jossey-Bass Pub., 1977, p. 75
- 6 Urofsky. op. cit. pp. 53-54.
- 7 Ibid., pp.58-59.
- 8 Sloan. op. cit., p. 243 参照。
- 9 Abraham Flexner. *Daniel Coit Gilman: Creator of the American Type of University*. Harcourt, Brace

- and Co., 1946, p. 61 ; 拙稿「世界大戦とカレッジの教養教育の転換」羽田積男編『多元文化社会アメリカの教育におけるオートノミーとコントロールに関する史的研究』アメリカ教育史研究会, 2000, p. 148 参照.
- 10 伊藤敏雄『米国近代大学史研究』風間書房, 1999年, p. 64 参照.
- 11 “Thomas Jefferson on Higher Education in Virginia.” In Theodore R. Crane ed. *The Colleges and The Public, 1787-1862*. Teachers College, Columbia Univ., 1963, pp. 39-41 参照.
- 12 Francis Wayland. *Thoughts on the Present Collegiate System*. (1842) In Crane. op. cit., pp. 121-122 参照.
- 13 Ibid., pp.124, 127, 131-133 ; Francis Wayland. *Report to the Corporation of Brown University*.
- 14 Sloan. op. cit., p. 245.
- 15 Henry P. Tappan. *University Education*. George P. Putnam, 1851, p. 82.
- 16 Jack C. Lane. “The Yale Report of 1828 and Liberal Education : A Neorepublican Manifesto.” *History of Education Quarterly*, XXVII-3 (Fall 1987), pp. 325-338 参照.
- 17 Sloan. op. cit., p. 243.
- 18 宮澤康人「ハーバード学則改正（1825）とイエールレポート（1828）」『東京大学教育学部紀要』15, 1976, pp. 16, 18 参照.
- 19 Edgar S Furniss. *The Graduate School of Yale : A Brief History*. The Carl Purington Rollins Printing Office, 1965, p. 4 参照.
- 20 Tappan. op. cit., p. 120 ; S. ロスブラット. 吉田文・杉谷祐美子訳.『教養教育の系譜』玉川大学出版部, 1999年, p. 95 参照.
- 21 Harlow G. Unger. *Encyclopedia of American Education*. Facts of File, 1996, I. p. 38 参照.
- 22 Peter D. Hall. *The Organization of American Culture, 1700-1900*. NYU Press, 1982, pp. 151-177 参照.
- 23 Sydney E. Ahlstrom. *A Religious History of the American People*. Vol. I. Image Books, 1975, p. 461 参照.
- 24 Jesse B. Sears. *Philanthropy in the History of American Higher Education*. Transaction Pub., 1990 (1992), p. 24, table 4 参照.
- 25 Hall. op. cit., p. 161 参照.
- 26 Sears. op. cit., table 4 から作成.
- 27 Hall. op. cit., p. 165 参照.
- 28 (Theodore Woolsey.) *An Historical Discourse Pronounced before the Graduates of Yale College, August 14, 1850*. New Haven, 1850, p. 122 参照.
- 29 Brooks M. Kelley. *Yale : A History*. Yale U. P., 1974, P. 154 参照.
- 30 Alison Rabil. *Content, Context, and Continuity : The Yale Report of 1828, Its Impact on Antebellum Higher Education with Implications for Contemporary Liberal Arts Programs*. Ed. D. dissertation, Teachers College, Columbia Univ., 1998, pp. 147-156 参照. なお, この論文の所在については, イェイル・レポート第一部の共訳者村瀬泰信君から知らされた.
- 31 Richard Hofstadter. *The Age of Reform : From Bryan to F. D. R.* Alfred A. Knopf, 1955 参照.
- 32 例えば, Francis N. Stites. *Private Interest and Public Gain : The Dartmouth College Case, 1819*. The Univ. of Massachusetts Press, 1972, P. 112 参照.
- 33 John S. Whitehead. *The Separation of College and State*. Yale U. P., 1973 ; Jürgen Herbst. *From Crisis to Crisis : American College Government, 1636-1819*. Harvard U. P., 1982 ; John S. Whitehead and Jürgen Herbst. “How to Think About the Dartmouth College Case.” In Lester F. Goodchild and Harold S. Wechsler eds. *The History of Higher Education*. 2nd Edition, Simon & Schuster, 1997, pp. 162-172 参照.

## イェイル・レポート（1828年）第一部

共訳

立川 明／新井 元／村瀬 泰信

[1] 当カレッジでの通常の教育課程の一部としての古典語の学習を廃止することの適否につき検討するという動議が付託された大学法人の本委員会は、本件に関する教授陣の見解を求めたうえで、以下のような諸点を慎んでここに提出する。

[2] 現在の教育方式に改善の余地のある点については、われわれの意見は完全に一致している。現在のシステムが不完全なことをわれわれは自覚しているし、その欠陥のいくつかはほどなく矯正されることを切に願う。われわれは、時たま変更をくわえることが、カレッジを囲む社会の多様な要望に対応し、また国家が人口や文化的な洗練度、豊かさの点で急激に発展するのにあわせて教育課程を順応させるうえで、好結果をもたらすであろうと確信している。更には、ヨーロッパの学術教育機関を注意深く観察することにより、また教育という主題を真摯に探究しようとする昨今広く見られる風潮により、重要な改善方策への示唆が得られるであろうことを疑わない。

[3] カレッジの守護者たちは、カレッジは停滞することなく、常に前進すべきであるとの原則のもとにこれまでたえず行動してきたように見受けられる。その結果、カレッジの創立当初から何らかの変更が、ほとんど毎年のように提案され続けてきたのである。したがってわれわれとしては、このカレッジという制度は変更を受け付けようとしなやか、カレッジは元来は修道僧たちの無知な時代に立案されたのだとか、更には「カレッジなど一つの停泊所に係留されっぱなしの船舶と同じで、脇を流れ行く進歩という海流の早さを測定する他は何の役にも立たない」とか言われるのを時折耳にすると、少なからず驚くのである。

[4] この学校あるいは合衆国の他の学校の実際の有り様は、上のような臆見とは正しく正反対である。カレッジを卒業の後、数年を隔てて再訪した者たちが、その間カレッジに導入された様々な変化

に驚きを表すのは日常茶飯事である。教育課程、教授方法が大幅に変更されたのみではない。化学、鉱物学、地質学、政治経済学等々のあらゆる科学も、全く新たに導入された。入学資格を高めることによって、到達の水準も引き上げられたのである。これほど広範かつ頻繁な諸変更が十分に証明していることは、カレッジ監督の任にある者たちがその古くからの特色のいくつかにいぜん固執するのは、有意義な改革にめくら減法に反対するからではなく、もっと高次の原理からそうしているという点である。これまで達成した内容を失なう危険を伴うことなく、なおいろいろな改善が可能な限りのスピードで今後も導入されつづけられるものと、われわれは信頼しているのである。

[5] しかし、これまでのように漸次の諸変化を遂げることで十分であるのか否か、また全システムを取り壊し、それに替わるより進んだシステムと取り替えるべきか否か、立ち止まり考えてみるべき時がおそらくは到来したのかも知れない。われわれはいろいろな筋から、われわれの諸カレッジは新規に模様替えすべきだとか、カレッジは時代の精神や必要に順応していないとか、さらには、この国家の実業的な性格に首尾よく適応しないかぎり、カレッジはやがて見捨てられるであろう、とかいう意見を耳にする。こうした意見は、本委員会につきつけられている問いと重大な連関をもっていそうなので、大方の堪忍を請い、当カレッジにおける現今の教育方式の本性と目的のかなり詳しい説明をまずは試みたい。

[6] われわれがカレッジ教育の目的を明瞭に把握していなかったならば、現今の教育課程を維持すべきか、はたまた変更すべきかの適否を決定しようと試みても無駄であろう。一つの学習プランはある特定の目的には十分に叶うものであっても、しかし別な目的には全く不適合であろう。大学、カレッジ、アカデミーあるいは専門職業向けの学校は、皆が同一のモデルに基づいて構成されるのではなく、銘々がそれぞれ目指す目的を達成するよう互いに異なっているべきなのである。

[7] それではカレッジに相応しい目的とは何か。ある機関にいかなる場合にもカレッジの名を称さしめ

うような目的とは何か、をここで特定する必要はないであろう。だが、もしわれわれが当カレッジの後援者や守護者の構想について大きな思い違いをしていなければ、その目的は優れた教育のための基礎を築くことである to LAY THE FOUNDATION of a SUPERIOR EDUCATION. しかもこうした作業は、親による監督に替る新たな監督が必要となる人生のある時点でこそなされるべきなのである。完璧な教育のための基礎作業は幅広く、深く、そして堅固でなければならない。不完全で皮相な教育のためであれば、その基礎部分は軟弱な素材で事足りるし、その構築にも時間を要しないのである。

[8] 知的教養のなかで獲得されるべき二つの重要な効果は、精神の陶冶と装備とである。すなわち精神の諸力を拡張し、またそこに知識を蓄えることである。二つのうち前者が、恐らくはより重要であろう。カレッジの課程において指導的な一つの目標は、したがって、学生の諸能力を日々きびしい鍛練にさらすことであるべきである。では勉学にはどのような諸分野を指定し、どのような教授様式を採用すべきかといえば、それは次のような技芸を教えるべく計算し尽くされた諸分野や教授様式をである。注意力の集中、一連の思考内容のしっかりとした方向づけ、また探究を試みる主題の分析、加えて正確な識別力をもって議論の筋をたどる力、提示された証拠と（それに基づく）判断内容とのきちんとした釣合わせ、想像力の覚醒と高揚とその制御、記憶が呼び戻す財宝の巧みな整理、そして才能の諸能力の覚醒と方向づけとを教えるべきなのである。これら全ての訓練が、軽量で促成の学習課程、すなわち何冊かの本を読み、いくつかの講義を聞き、またわずか数ヶ月を学術教育機関で過ごすことだけで成し遂げられるはずがない。思考する習慣は、長期に渡る一貫しかつ精密な勉学への専念によって形成される。もし、機械的技術の多くにあって、器用な手作業の遂行にさえ何年ものためまぬ集中を伴う徒弟修行が必要であるのだとすれば、精神の諸力の訓練にはそれを遥かに上回る旺盛で、着実で、かつ体系的な努力を要するのである。

[9] 徹底した教育の基礎を置くにあたっては、重要な精神的諸能力の全てが訓練される必要がある。一つか二つのみを涵養して、他の諸能力を省みないのでは不十分である。豪華な建築をたった一本の柱のうえに載せておくべきでない。ある部分の精神的資質だけが他にくらべて格段に高く涵養されるならば、知的な特性には歪みが生じる。精神の多様な諸力が自然に設計されたままの公平な比率において訓練されなければ、精神は決して最高度の完成にいたらない。もしも学生が思考の諸能力だけを練習するならば、彼は想像力や鑑賞力、また熱烈で人を動かす雄弁を欠くであろう。もしも学生が論証的な証明能力にのみ注意を限定するならば、確率的な諸事例について正確な判断を下すには不向きとなろう。もしも学生が主として記憶力に頼るならば、創作にかかわる諸力は用いられず損なわれるであろう。当カレッジでの教育課程においては、適切なバランスを保った特性が学生のうちに形成されるように、文芸と科学の異なる諸分野の間に一定の比率を維持することを一大目標としてきた。学生は、純粋数学から論証的な思考の技芸を学ぶ。物質諸科学に精を出すことで諸事実に通じ、かつ帰納の過程や様々な確率的証明法に習熟する。学生は、古典文学では鑑賞に関して最も完成されたモデルのいくつかを見い出す。英語の読解において自ら話し書く言語の諸能力を培う。論理学と精神哲学によって思考の技芸を、修辞学と雄弁術によって語りの技芸を教わる。頻繁な作文の練習によって、豊かで正確な表現力を身につける。そして即興の討論によって機敏となり、流暢となり、活発となるのである。雄弁と堅実な学識とが相伴うということ、すなわち思想という財産を最も豊かに蓄積する者が、雄弁についても最高度の能力をもつことが極めて重要な点である。もしも人がその知識を伝達する能力をもたないならば、深い学識を得たところで何になろう。他方、伝達に値する内容をほとんど全く知らない者が、修辞的な優雅さを披瀝したところで何の役に立とう。Est enim scientia comprehendenda rerum plurimarum, sine qua verborum volubilitas inanis atque irridenda est. Cic. [まずは数多くの事

柄の知識をしっかりと把握せねばならない。それなしには、雄弁は空虚でこっけいな言葉の渦にすぎない。キケロ。『弁論家論』I-v.] かくして、われわれの課程は科学と文芸との結合、すなわち堅固な学識と説得の技能の熟達との結合を目指すのである。

[10] 知的な教育のシステムの中で何にも増して重要な特色は、課業と動機とをうまく組み合わせ、学生が自分自身の精神という資源に頼るよう効果的に導くことである。この一事を欠けば、たとえ図書館、実験道具、標本、講義、教師などの道具立てが揃っていても、抜群の優秀さを確保するには不足であろう。学徒は自分自身の努力により、自己を形成せねばならない。カレッジに住み込むことで得られる利点は、せいぜいのところ彼の自らの努力を刺激し援助することでしかない。創作的な諸能力については特別に精力的な訓練を施すべきである。いくら大量の知識を学生が獲得したとしても、もし思考を新たに組み合わせる能力を欠くならば、彼は鈍重で非能率であろう。精神による最も崇高な努力の核心は、想像力にもとづく創造と知性にもとづく発見、科学の領土を拡大するような（重要課題の）征服に存する。しかし、創造的な諸能力の涵養が、教養教育の唯一の目的というわけではない。最高に傑出した理解力をもってしても、各時代の知恵が結集した科学の総体を大きく拡大することはできない。仮にある若者が最高度にまで涵養された諸能力を備えていても、他の人たちに由来する知識なくしては、日常の用務さえままならないであろう。したがって、精神の陶冶に加えて、教え込みが必要である。分析的な方法に総合的な方法を結合せねばならない。分析は創造的な諸能力を方向づけるには非常に有効である。しかし、限られた時間の範囲内で諸科学の全体を教えるには、その進行速度はあまりに遅過ぎるのである。

[11] 知的な陶冶の場合と同じく、知識の伝達におけるわれわれの諸方策においては、均整とバランスのとれた人格を形成するような諸分野が教授される。われわれは精神の諸力が、言語のみ、数学のみ、自然あるいは政治科学のみの学習によっ

て、最高に均整のとれた形で発達するものかどうか疑うものである。人間の肢体が一つだけの単純で均一な運動ではなく、多様な練習によってこそ最高度に完成されるように、同様にして人間の精神的な諸力も科学の異なる諸分野に精通することによって拡大され、強化され、相互に適応するのである。

[12] この国の諸カレッジの一大特徴は、一般的にはその学生たちが、丁度親による保護監督の替わりを探してやる必要のある年令にある点である。学生たちが両親の家の廂を離れ、いまだ未経験の様々な誘惑にさらされる時、誰か誠実で愛情に富んだ守護者が、彼らの手を取り、その歩みを導いてやる必要がある。こうした考慮が、われわれの諸カレッジにおいて維持されるべき監督の種類を決定する。カレッジでの監督は家庭での諸統制の代わりである以上、諸状況が許す限り親による統制の性格に近似すべきである。そうした監督は相互の敬愛と信頼の上に成立すべきである。その目的は、主としては思いやりと説得に基づく影響を通して達成されるべきであって、全面的ないし主に拘束や脅しによるべきではない。そうはいっても、時には罰も必要であろう。家庭の場合と同じく、カレッジにも道を外れた者たちがいるかも知れない。法の力をもってしか始末に負えない者たちがいるかも知れないのである。

[13] カレッジでの監督が親による統制的な性格をもつには、学生たちが一つの家族を構成するように集められており、学生たち同士とともに、教員たちとの交流も頻繁でかつ気安い必要がある。こうした事情のため、学生たちの居住に適した建物を用意せねばならない。いま問題にしているのは、学生たちの大部分が遠方から集まっている田舎所在の諸カレッジについてである。学生たちが家族と共に暮らしている大都會では、学生ラウンジのみで足りる。こうした事情は、学生たちの年齢が高く、したがって教師によるこまごまとした管理も不必要な専門職向けの学校においても同様であろう。

[14] 以上でわれわれが当カレッジでの教育に相応しい目的と理解する内容、すなわち文芸と学問の

堅固な基礎を置くことを述べたので、ここで許可を請い、こうした目的を実現するために用いられる手段について二三意見を付加したい。

[15] 教育課程を実施するにあたって、われわれは一方では講義と、他方分かりやすい述語では復唱と呼称される練習、すなわち教科書の内容についての検査との間に、適切な比率を保つよう意図的に努力している。講義のもつ一大利点は、それが講師の最高度の努力を必要とし、かつその専門家への飛躍を加速する一方で、講義の主題にたいし、学生の関心と熱意と呼び覚ますような輝きと精神とを与える点にある。講義は、科学の諸原理を生きた雄弁という魅力的な衣装に包み、学生の眼前に提示することもできる。実験器具を説明し、実験を行ない、あるいは標本を展示する場合には、講義こそ相応しいコミュニケーションの様式であろう。しかしながら、われわれは講義だけで教育の全ての目的が見事に達成されるとは決して信じていない。講義だけでは、学生にたいして差し迫った明確な責任にいつも気づかせうるとは限らない。学生は、自己自身の精神の活発な諸力を全く鍛練することなく、自分の席で眠りこけ、受け身的に講師に耳を貸しているだけかも知れない。このような欠陥については、一つには講義の諸主題につき頻繁に試験を実施することで、改善しようとしている。それでもなお、学生が自己自身に立ち返り、自らの思想により堂々たる方向性を与える機会をもつことの方が、口頭での講義に耳を傾けている時よりも重要である。学生の堅実で真面目な努力を確保することこそ、日々の試験や復唱の一大目的である。こうした練習では、教科書が通常は導き手となる。その特定の部分がクラスの会合ごとに割り当てられる。かくすることによってのみ、責任を十分に明確化できるのである。もしも、課題が同じ主題を扱った何冊もの書物に分散していたならば、それらの間での言明の多様性が、学生に自分の回答の不正確さの口実を与えるであろう。加えて、新しい学問への第一歩を踏み出した学生にたいし、半ダースもの異なる著者を同時に読むよう指図することほど、学習者を困惑させ混乱させるやり方をわれわれは知ら

ない。何もまともには学べない危険に学生はさらされるであろう。自分の専門職の学びに従事する段ともなれば、学生は迷路も切り開き、それぞれ別個のポイントの検査に何日も何週間をも充当して自分の意見を堅固に確立するであろう。したがって、このように進んだ段階の教育においては、カレッジでの課程においてほど教科書は必要でない。カレッジでは、個々の分野に割り振られる時間が、学習者を基本的な諸原理に精通させるに十分なことはほとんどないのである。二三の例外を除けば、これらは新しくも議論の余地のある論点でもなく、とうに決着済みのものである。これら論点は、ある有能な著者の名声を高める形で、一貫した独特な仕方では表現されているのである。

[16] しかしながら、われわれのクラスでは、特定の諸主題に関しては、文章を通してのおよび即席の論駁において、十全な調査や討論の機会が与えられており、練習課程の重要な部分を形成している。教科書を真剣に学んだ上で、その限界を超えて自己の探究を広げる時間が学生にある限り、彼の指導教員は当該の授業についてより重要な諸点を取り扱っている種々の著者を指摘したり、訂正や具体例、それに教員自身のコメントを加えることによって、学生を大いに裨益することもある。このようにして、われわれの日々の練習の少なからぬ部分は、意図されざる即席の講義へと移行する。しかし、説明やコメントという行為は、学習者の側に必要な努力に取って替る場合にはいつでも、行き過ぎとなる。もしわれわれが間違っていなければ、言葉数の多い口頭による教授が人気を博する理由の少なからぬ部分は、学生が自己の精神を動員せずに済ませる満足感に帰するのである。学生の責任感をかかも日常のかつ具体的なものとするのは、その知的諸能力の絶え間ない不屈の鍛練を確保するためである。この目的のために、われわれの年次中間試験は制定された。これら試験には、四年生向けの七月の試験と同じく、年間に十二日から十四日があてられる。それぞれのクラスは二つの部分に分けられ、同じ時間に別室で日に七時間か八時間の試験を受ける。その際には、州の各地からの教育ある卓越した紳士たちが、委



員会の体をなして臨席する。いくつもの分野で課せられた問いにたいする各学生の回答の正確さの度合いは、その場で記録され、教授団によって永久に保管される。しかし、教員たちにとっては、こうした公開の試験よりも、復唱の教室での日々の試験の方が、間違いのない学業試験となる。公開試験は、学外者から寄せられる様々な疑問に応えるためのものなのである。

[17] われわれの考えでは、カレッジの制度を適切に調整するためには、カレッジ内に教授たちとチューターたちと両方がいることが不可欠である。一方では、カレッジに長く定住している教授たちの経験が必要であり、他方では、最近になって学生たちと混じりあうことになったがゆえに、彼らに特有な感覚、偏見、そして考え方の特徴を明瞭に記憶しているチューターたちの新鮮で細心の情報が必要である。科学の代表的な分野のそれぞれには、統率者として学科を統括し、教育計画を立案し、計画の実行のやり方を統制し、そして主題のうちでより重要でかつ難解な部分を教育する一人の教授がいなければならない。しかしながら、科学の初歩を開始したばかりのカレッジの学生は、難解で議論百出の諸点を主として学ぶ立場にはいない。彼らの関心をもっぱらあるいは主として、最新の諸発見にたいし向けてはならないのである。彼らはまず最初は、時代の変化を貫いて共通に探究され、その結果単純化を経て定着した諸原理を学ばねばならない。現在まで未開拓の領域に到達するに先立って、彼らはすでに開拓された中間の大地を通過せねばならない。学科を統率する教授は、したがって、教育課程のある部分については、分野のあらゆる子細について彼自身程は通曉していない者たちから大きな助けを期待できるであろう。実際のところ、研究面で上記の単純な諸真理を遙かに超えてしまっている教授は、そうしたレヴェルへ立ち戻ることを厭い嫌悪する以上、根本的な諸原理を教えるのに常に最も相応しいかどうか疑わしいのである。例えば、アイザック・ニュートン卿が算術のありふれた規則の教授者として、彼の時代の他の誰をも凌いだといえようか。若い人々は、ありふれた諸原理を伝達することにも、

また自分自身も遠く無い過去に勉学途上で遭遇した軽微な諸障害を生徒から取り除いてやることにも、しばしば大いなる熱意で取り組むものである。

[18] カレッジの内部の統治においては、学生たちを一つの家族としてまとめるにあたり、教員たちの一部は、食事や日課の時のみならず休息の時間帯でさえ、学生たちと共にあって、この家族の一員を構成することが不可欠の措置であるといえる。われわれのカレッジの建物では、学生たちの占有する部屋はどれも教員たちの誰かの部屋に近く配置されている。

[19] しかし、かなり多くのチューターたちを不可欠とするわれわれの制度の最大の特質は、クラス（学年）を分割し、そのそれぞれを一人ずつの人間の特別な責任にゆだねる点にある。第三学年までの下級クラスはおのおの二つから三つに分割され、それぞれが一人のチューターの監督にゆだねられる。チューターは自分の受け持ちグループを教えるだけでなく、他のチューターたちと交換して自ら得意な分野を教える機会を得たりするが、にもかかわらず、自分の受け持ちグループとは復唱室で毎日二三度顔を会わせ、また別ないろいろな機会に彼らの行動を緻密に観察することを通して、他の仕方では確保できない形で、カレッジの統治に奉仕するのである。統治は親によるそれと出来うる限り類似の性格の、温和で感謝を伴うものとなるよう意図されている。しかし、こうした統治の基礎は、日常的で特に親密な関係から初めて生じるような、相互の愛着でなければならないのである。もしも、一人の教師が、八つから十ものグループを矢継ぎ早に教えるとするならば、彼にとって、学生の全員と極めて近い関係に立っていると実感することは難しいであろう。また、もし一人の学生が、一ダースもの異なる教員の復唱に順繰りに出席する場合、彼がその全員を尊敬することはありうるが、しかし特別な愛着をもって見ることはまず期待できないのである。

[20] 個別のグループのチューターは、彼の生徒たちの諸特徴を親しく熟知するという、他のカレッジ職員の誰にも与えられない機会をもつ。こうした知識が教授団の管理下にあるということは、極

めて重要である。われわれの家族を別々な諸個人の間で分配することによって詳細な情報が取得され、しかも必要であればいつでも理事会に伝達しうるのである。同時にこの方法に基づけば、連帯責任として全体に課せられる場合と比べ、テューターのおのの責任を遥かに明確にしうる。教授の各自は自らが代表する学科の賢明な組織化に責任をもち、そうした組織化のもたらす成功は、彼個人の努力や才能による限り、その教授に帰せられる。テューターは、ある程度まで、彼のグループの学生たちの進捗と正しい行状とに責任をもつ。しかしこれに対し、個々人への明確な割り当てのないまま、多数者の共同資産として受け取られる場合、責任というものはほとんど実感されないのである。教授とテューターの比率を適正に保つことにより、われわれは経験のもつ利点と、熱情および活発さとを、また含蓄のある探究と、基本的な諸原理への細心の注意とを、統合しうるのである。同様に、個々の人格へ愛着をもち、個々人として責任を負うという利点と、全体に統一と調和とをもたらす形で、システムの別個な諸部分を調整するという利点とを、統合できるのである。

[21] 以上でその概略を説明したカレッジの教育課程が、これまで混同され過ぎてきたいくつもの他の目的や方法とは慎重に区別されることを、われわれは期待する。カレッジの教育課程は、学生に学ぶ機会があるものなら何でも包摂するというのからは程遠い。その目的は彼の教育を完成することではなく、その基礎を置くことであり、学生の短いカレッジ在籍期間のうちに許される限りで最高の構造物を建てるまで前進することである。もしこの間に学問の諸原理につき徹底した知識を身につければ、学生はあとの大部分は自力で学ぶであろう。彼は少なくとも、学習する方法は教わったのである。書物の力や観察の手段を借りて、彼は絶えまなく知識を増大させようであろう。意義あるあらゆる話題について普遍性のある見解を身につけているので、彼はどこへ行こうと、誰と仲間になろうと、耳にする意見や討論を理解し、消化し、正しい意見を形成することができる。知るに値する重要な事柄のうちには、どこでも学べるがゆえ

に、カレッジではあえて教えないものも数多くある。知識は不可欠ではあるが、しかし光や空気そして水に似て、われわれの仕事の上で自由に到来するものなのである。

[22] カレッジの学士課程の学生向けの教育課程は、専門職向けの学習を含み込むようにはデザインされていない。その目的は、いかなる専門職にも固有な内容を教えることではなく、専門職全てに共通な基礎を置くことなのである。医、法、神学については、カレッジに併設されている学校、また全国各地に点在する学校といった、別個な学校が存在する。これら学校は、おのの専門職に特有な学習向けの準備ができていて、門戸を開放している。カレッジの学芸課程は、こうした専門職向け訓練と競合するつもりはない。

[23] それでは何故、と問う者があるだろう、学生は将来の専門職と直接には関係のない学習に時間を浪費せねばならないのか。化学を学べば法廷で弁じられるようになるのか、あるいは円錐曲線論は説教する資格を与えてくれるのか、あるいは天文学は医術の実践の助けになるのか。彼の生涯の仕事に占有するであろう主題に関心を限定して、何故いけないのだろうか。こうした問いに対しては、専門職上の技能に資することのない学問など存在しない、と応えてよいであろう。「すべてがすべてに光明を投げかける。」専門職の学習への準備として見た場合、カレッジ教育の一大目標は、学生の精神的諸能力を拡大してバランスを与え、思考が特定の回路に常に限定された人間には見出しえないような、リベラルで広範な物の見方および見事に調和した人格とを付与することである。専門職の実践を開始したなら、人はその精神的なエネルギーを、主としては、固有の職務に注がねばならない。しかし、そうした人の思考が専門以外の主題には全く及ばず、また文芸と科学という豊かな外の世界へも全く向けられないとすると、その人の思考の習慣は狭隘となり、その人格は特異となり、狭量で貧才な人物と間違いなく目されることになる。自らの専門職に秀でていればそれだけ、仕事以外の主題に関する無知と教育上の欠陥とが白日の下にさらされるであろう。一方、専

門職者として卓越するのみならず、博識をも備えた人物は、その人格も気高く威厳をもち、社会への影響力も多大で十分に広やかな分野で役に立つであろう。そうした立場からであれば、社会のあらゆる階級の人々に、科学の光を普及することができるだろう。専門職を全うして生計をたてる以外に、人は何か目標をもたなくてよいものだろうか。人は家族や、仲間の市民たち、そして自分の国家に対しても、その遂行には多様で幅広い知的な備えを要する諸責務を負っているのではないだろうか。

[24] 専門職向けの学習はカレッジの教育課程からは意図的に除外しているが、その目的は、もしカレッジの在学中に開始しなければほとんどの場合に決して学ばれることのない、文芸と科学の習得に余地を残すためである。文芸と科学の習得は、ビジネスの喧騒のただ中で内発的に育つものではない。われわれはこの場では、もって生まれたエネルギーで、不完全な教育の障害を打破し、自ら非凡への道を切り開く偉人たちのことは問題にしない。こうした偉人たちは一般原則に対する荣誉ある例外であって、誰もが模倣できるお手本ではない。ベンジャミン・フランクリンやジョン・マーシャルのような人物は、一校のカレッジさえ満たす程の数もない。しかも、もしこの国にカレッジが存在しなかったなら、フランクリンでさえも、あるがままのフランクリンとはなり得なかったであろう。高等文芸機関によって高度の教育水準が維持されている場合には、こうした機関に入学し得なかった優れた能力の持ち主たちも、自らの努力によって、また彼らの周囲に輝く啓蒙の光の力を借りて、同様の高みを目指すよう激励されるのである。

[25] われわれの教育課程は、神学、医学、法学の教育の完成を意図していないと同様に、商業、工業、農業の関連事の詳細は一切含んでいない。これらの詳細は、まさにその実践が行われる環境そのものの中を除いては、決して効果的には学べない。若き商人は会計事務の部屋で、機械工は作業場で、そして農民は耕地で訓練されねばならない。しかし、われわれの構内には実験農場も、小

売り商店も、綿織物工場もないし、帽子屋、銀器職人、馬車職人のための施設もない。それでは、前述のような諸職に就く宿命の若者たちは、一体何のためにカレッジに送られるのだろうか、と問われるのであろう。われわれが思うに、彼らは教育の仕上げを期待されてではなく、実践的な技芸を学ぶに先立ち、科学の諸原理の徹底した基礎を置くことを目指して、カレッジに送られるべきなのである。四年間で全てを学習するのは不可能なので、理論あるいは実践のいずれかは、少なくともその幾分かは、将来の機会に先送りせざるをえない。しかし、もし技芸について科学的な理論を仮にも獲得させるのであれば、時間の順序ではそれが疑問の余地なく最初に来るべきである。上部構造をつくる前に、まず隅の礎石を置かねばならない。もしも適切な調節がなされたならば、商業、工業および農業教育の詳細は、カレッジでは、在籍する学士課程卒業生たち (resident graduates) に向けて行われてよい。そうなれば、実践的な技能は科学的な知識に基礎づけられることになるだろう。

[26] では若者は学位を取得すると、一体何に適格となるというのか、と問う者が恐らくはあるだろう。彼は実業に従事する資格を得てカレッジの門を出るのだろうか。われわれの答えは「否」である、もしも彼がその時点で教育を終えるのであれば、彼の教育は始まりはしたが、しかし完了してはいない。カレッジは、もともと成し遂げようなどと全く企てなかったことを達成しなかったからといって、非難される理由があろうか。われわれは、家の基礎工事を行った石工が、何の目標も達成しなかったといって、不平を漏らすであろうか。すなわち、石工が建物を完成させておらず、彼の労働の産物は全く居住不可能であり、したがって彼のしたことは何の役にも立たない、と不平を言うだろうか。綿を栽培する農場主は、その作物に着られる衣服という形を与えていないから、役立つことは何もしていない、とわれわれは言うだろうか。

[27] 道徳の場合と同じく教育においてもしばしば耳にするのは、実践こそが正解であれば、諸原理は全く重要でない、という意見である。実践的

な技芸の習得に是非とも必要な時間を、諸理論のために浪費する理由がわからない、というのである。われわれも知っているように、ある種の操作というものは、それらが依拠する諸原理をほとんどあるいは全く知らなくとも成し遂げられる。水夫は力の分散の法則を解しなくとも、風の方向に対して帆を張れるだろうし、大工は『ユークリッドの原論』を知らなくとも、枠組みを四角形にできるだろうし、また染物師は化学の諸原理を教え込まれていなくとも、染色できるであろう。だがしかし、こうした職人の労働は、他人によって明確に指示された狭いレールの上に限定されている。こうした職人は、より博識で科学的な知識を備えた者たちから、絶えず指導を仰ぐ必要がある。もしそうした職人が既定の規則の外へあえて踏み出せば、彼は自分を導く確かな諸原則を欠いたまま、行き当たりばったりに働くことになる。長年の継続的な実践をとおして、職人は相当な手先の熟練を身につけているかも知れない。しかしながら、事業の諸計画を調整すること、機械工程に新規の構成を導入すること、技芸上の発明や発見をすることなどは、一般的に言って、高度かつ体系的に涵養された精神の産物とならざるを得ない。科学の諸原理には、単なる一職人には思いもよらないような生産力がある。ただ一つの一般原理でも、千あるいは万もの具体例を包含しているが、そうした具体例の個々を理解し記憶する難しさは、全てを説明してしまう一つの法則を理解し記憶する場合と同じ程度なのである。実践的な詳細のみを身につけた人間は、機械工場での下級の作業員として確かに相当の人数が必要であるが、しかし上級のポストを占める人間には啓発された、包括的な視野が必要なのである。

[28] われわれはカレッジにおいては理論のみが教えられるべきだ、とは毛頭信じていない。理論は実践的な諸例証と関連づけずには、効果的に教えられない。諸例証は、理論の教授に対する学生たちの関心を励起させるため必要であり、特に諸原理の応用を示す場合に重要である。したがって、科学の諸探究に従事する間において、それら諸探究を、可能な限り、実践的な諸例証や諸実験と融

合させることがわれわれの目標となる。ニュートン、アルキメデスといった人々の名を不朽のものとした荘厳な諸発見は、もしも彼らの解明した諸原理を実践へと引き移せる人々に全く教えられなかったならば、何の効用があるというのか。もしも独創的な研究の諸成果が一握りの科学者たちに独占され、生活の活動的な責務に従事する者たちの間に普及しなかったならば、果たしてわれわれは非凡な才能に最大限の賛辞を贈るだろうか。科学の諸原理を労働者階級による実践的な応用にまで引き降ろすことが、優れた教育を受けた者の役目である。理論と実践との分裂こそが、知的階級と労働者階級との双方に対する非難が生じている原因である。両者の統合によって初めて、両階級は真の威厳と価値とをもつ位置にまで高められる。科学者は、単なる職人の狭隘で偏った視野を目にすると、彼らに対してしばしば優越感を誇示しがちである。職人の方はといえば、その仕返しに、科学者の実践上でのぬかりを嘲り笑うのである。両階級の教育に見られるこうした諸欠陥は、実践に先立って、科学の諸原理の知識をそれぞれに与えることにより、矯正されるであろう。

[29] 徹底した教育が万人に手の届くものでないことを、われわれは認識している。多くの者たちは、時間と金銭上の不足とのゆえに、部分的な課程で満足する他はない。不完全な教育でも、無いよりはましである。もし若者が、二年ないし三年きりでも、科学および専門職向けの教育に身を捧げるのであれば、最も重要な二三の分野を選択し、彼の注意を専らそれらに集中することが肝要である。にもかかわらず、こうしたあり方は、状況の必要から生じた不完全な事態である。部分的な勉学課程は、不可避免的に偏った教育をもたらさざるを得ないのである。

[30] 不完全な教育が皮相的な教育よりは余程好ましいことを、われわれは確信している。公衆に提供されるあらゆる講義計画のうちで、ほとんど何でも全て短期間に教えると申し出るものが一番非常識である。この方法によっては、何も効果的には教えられない。生徒は、余りにも素早く表面をなぞらされるので、課程を終了した時点で、彼

の足跡はほとんど何も残っていないのである。彼が学んだこと、ないし学んだと思っていることでは、彼の虚栄心を助長し、大衆の注目に自らを晒し、堅実な判断力と学識とを備えた人々からの嘲りを招くのがおちである。不完全な教育はしばしば役に立つが、しかし皮相的な教育は金輪際そうでありえない。若者は何にせよ学ぶことを試みるつもりなら、如何に限られた内容であれ、十分効果的に学んで、自分にも実践的に役立つようにすべきである。知るに値する全てを四年間で学ぶ仕方が存在するのか否か、われわれはそうした秘訣を所有していないことを素直に白状しておく。

[31] しかし、と人は問うであろう、何故どのカレッジにおいても学生は同一のステップを踏まねばならないのか。学生の個々は何故、彼の一番の好みで、彼の固有の才能に一番適し、目指す専門職に一番つながりが深い諸分野を、選択することを許されないのか。こうした問いに対し、われわれは答える。われわれの定めた課程は、徹底した教育を目指す者なら誰でも理解しているべきである、とわれわれが考える諸科目しか包摂していない。これら科目はどの専門職、どの技芸にも特有な内容ではない。そういった内容は専門職向けないし実践的な諸学校で学ばれるべきものである。しかし、科学の諸原理の方は、あらゆる知的な才芸に共通する基礎である。われわれの初等学校が、生徒たちの将来の如何にかかわらず、読み、書き、算術を全てに教えるように、どのカレッジも、高尚な職業を宿命とする者であれば知らずには済まない知識の諸分野を、全ての学生に教えるのである。現在カレッジで学ばれている科目のどの一つを排除しても、カレッジというシステムに重大な損傷を生じるのである。古典語については、この場で特に言及する必要もないであろう。均整のとれた優れた教育を目指す者であれば、一体誰が次のような分野の諸原理に不案内でいられようか。いわく数学、歴史と古代学、修辞学・弁論術、自然哲学、天文学、化学、鉱物学、地質学、政治・経済学、そして精神・道徳哲学。

[32] 学生は興味も潜在能力もない学科の学習を強えられるべきでない、としばしば考えられてい

る。しかし、初歩的な真理にさえ手を染めていないうちから、学生のある学科への興味や潜在能力のあるなしを、どうやって知るのであろうか。もしも、ある学生が、カレッジ教育の共通な諸学科を学ぶに足る才能を実際に欠いているなら、彼の行くべき先は何か狭隘な仕事である。しかしながら、われわれの確信する所では、学生たちは自ら時折公言する程には、知的な諸能力を欠いてはいない。もっとも、ほぼ完全に無用だと聞かされている学科の学習に関しては、自分には潜在能力がないと簡単に信じ込んでしまうのであるが。

[33] いくつもの科学の一般諸原理にクラスが精通するようになれば、彼らをいくつかの好みの勉強単位に分けるべき好機である。ここに至れば、彼らは実際に試すことを通して選択することができる。これはわれわれの三年生について、ある程度まで行われていることである。カレッジへの入学資格がもっと高く引き上げられれば、こうした分化をより早い段階で開始し、更に拡大することも可能となろう。

[34] われわれがこれまで本主題に関し採用してきた見解が正しければ、イェイル・カレッジでの教育システムの目標は、諸分野の一部のみで構成される不完全な教育を施すことではなく、また、他方、ほとんど全分野の浅薄な知識ばかりを詰め込んだ皮相な教育を与えることでもなく、更にはまた専門職向けあるいは実践的な教育の詳細を仕上げることでもなく、そうではなくてむしろ、徹底した教育課程を開始し、それをカレッジでの在学期間が許す限り継続することにある、ということがわかるであろう。われわれの教育システムの目標は、何であれ専門職に向けての訓練、もしくは高度な商業、機械工業、農業の経営に特有な業務の習得の直前の四年間を、最大限有効に利用することなのである。

[35] カレッジでの教育は専門職への準備に止まるので、その教育が依拠する計画は、専門職向けの学校からの引き写しではない。二つの教育課程での異なる特質と、入学してくる学生の年齢の違いとから由来する、重要な諸相違が存在する。専門職向け学校においては、教科書というよりも主題

が学ばれて当然である。この段階では、学生は諸科学の単なる基礎を学ぶのではなく、知識の一大分野に徹底的に精通するのであって、その学習のために何年間も身を捧げるのである。他の人々の多彩で対立する意見を比較し、つり合いをとるといふ、ゆっくりとした過程をとおして、彼はあらゆる重要な諸点について自己の意見を定着させる時間を与えられるべきである。この段階の教育においては、講義の比率は相当に高くとも許される。同一分野で長く継続された探究によりかき立てられた深い興味は、基本的な勉学の場合には必要な細部にわたる責任の必要に取って替る。学生の年齢と、ほどなく専門職の実践に入り込むという見通しとで、規則や罰則という強圧的な影響力がなくとも、学生が孜孜として勉学に励む保証としては一般に十分なのである。

[36] カレッジでの諸拘束は専門職向けの学校よりは大きいとしても、一般的なアカデミーでの場合よりは小さいと言える。アカデミーでは、生徒は教師の眼前で勉学する。十歳や十二歳といった早い年齢の生徒は、若いとはいえもはや子どもではないカレッジの学生たちに比べ、教師と談話を交える中で、遥かに頻繁に助言と激励とを必要とするのである。

[37] われわれのカレッジは、ヨーロッパの諸大学を正確に模してはいない。状況の違いが、異なった組織を得策とした。専制的諸政府の多くは、高等教育から生ずる利点を二三の特権的な場に集中する方針をとってきた。例えば、英国では、オックスフォードとケンブリッジという古くからの大学はいずれも単一の機関ではなく、隣接してはいるが、はっきりと別な数多くのカレッジを集めたものである。しかしこの国においては、われわれの共和國的な伝統と感情とが、学芸の一ヶ所への独占を決して許さないであろう。合衆国では、少なくとも州の数だけカレッジがなくてはならない。もしも、これだけの数に後援母体が細かく分散した結果として文字どおり飢餓が生じるのでなければ、われわれはこうした配置を賢明と看做すであろう。もしも、カレッジが資産を十分に確保できさえすれば、カレッジの増加が悲惨な結果を招くことはない

と考える。もっとも、われわれに危惧がないわけではない。合衆国での文芸の成長が弱々しく不十分なのは、公立教育機関の大多数に対する資産の提供がいかに乏しい結果なのではないのか、という点である。

[38] ヨーロッパ大陸、特にドイツにおける諸大学が、最近わが国の消息通の間で注目され尊敬を集めている。そうした諸大学は幅広く豊かな基礎の上に立ち、仕上げの教育に多大な便宜をはかっている。しかしそうした諸大学は、果たしてアメリカの諸カレッジが細部に渡り模倣すべき手本であるかのかについては、われわれは疑わしいと思う。イエール・カレッジだけは、そうした模倣を実行する財源がない間は、ヨーロッパの諸大学の真似を試みるという馬鹿げた苦行から免れることを少なくとも願うものである。われわれが知る限り、この国で唯一ヨーロッパの諸大学の流儀に基づいて始められた大学は、開学に先立って三十万ドルという出費を必要とした。この額は、イエール・カレッジが実に百二十五年の間に諸個人および州から得た援助金の合計を、遥かに上回るのである。ドイツの諸大学に入学する学生たちは、この国の諸カレッジの場合に比べて、歳も上で、高い水準の学業準備を経ている。ドイツの場合では、ギムナジウムと大学とでそれぞれ過ごす期間として二分割されているだけの教育期間は、合衆国ではグラマー・スクール、カレッジ、専門職向け学校に三分割されている。ドイツの大学に入学する生徒は、科学ではともかく、文芸に関しては、カレッジ卒業時点での合衆国の学生に近いが、ないしは同等のレベルにまで進んでいる。学業水準と学生の年齢の点においては、合衆国の諸カレッジに最も近似するドイツの機関はギムナジウムなのである。ドイツの諸大学の方は、ほとんど専門職向け教育に専心している。例えばハレ大学では、千百名の学生のうち、六十名を除いて全員が神学、法律、医学の勉学に従事している。しかし、合衆国では専門職向け学校は国内に散在し、その多くはカレッジから遠く離れている。キリスト教の多様な諸教派は、それぞれ自分たち独自の神学校をもっている。法学を学ぶ者たちは多数の州に分散し、それぞれの

地域に特有な法の慣行に順応した教育を受けている。もしも、イエイル・カレッジに附属する神学、医学、法学の各学校に、ドイツでは哲学校と称せられる文芸と科学の高度な研究用の学校が付加されることになれば、四つの部門を合わせてヨーロッパ的意味における大学を構成するであろう。そうした場合でもなお、固有なカレッジ部門は明確で特有な目的をもつ。すなわち、他の四つの学校全てへの準備となる諸分野を教えることである。われわれが思うに、カレッジの学生たちが現在よりも、年齢と修得知識との点で、三年あるいは四年分は進歩しない限り、大学での教育上の規則や流儀をカレッジでも採用しようと検討するのは無駄である。この国の親たちは、教室での秩序の遵守以上の躰を試みようとはさえない学校に、十六歳の自分たちの息子を納得づくで送るだろうか。学生が陰しくて面白みのない基礎的な勉学の領域を超えて、科学の偉大な達人たちが熱情あふれた競争心をもって前進しつつある広大で魅惑的な大地に歩み出るとき、文法書や辞書や注釈書を片手にラテン語やギリシア語を一ページずつこつこつと読む段階を終えて、これら言語を楽しみながら自由に読めるようになるとき、更に、文芸の広範かつ多様な諸領域の概観を終えて、学生の才能と指向とに最も適合した涵養個所を選択するとき、こうした時さえ来れば、学生に自らの道を歩むがままに安心して行かせてよいであろう。しかしながら、学士課程の学生たちから成るカレッジが、両親による統制の替わりを備えないままの状態、この国で未永く支援をうけ得るものなのか、われわれは大いに疑うのである。

[39] われわれはヨーロッパの諸学芸機関が、アメリカの諸カレッジにとって丸ごと模倣すべき完璧な手本だとは考えないが、他方、われわれの共和国の諸学校より古い起源を有する教育体系の特徴を全て非難するなど思いもよらない。長い年月に渡る諸経験から世界が全く何も学ばないなどわれわれは想定していないし、また科学の一分野、あるいは一つの教授法が、色々な国で何世紀にもわたる試練の後にも持ちこたえている、というまさにその理由で、こうした分野やこうした教授法を

放棄すべきだとも考えていない。われわれの信ずるところ、アメリカの諸カレッジはヨーロッパの諸大学や諸学校から改善への重要な手掛かりを得るであろうが、こうした手掛かりは、彼らのあらゆる方策を何の区別も無く盲目的に採用することによってではなく、ヨーロッパの諸流儀のうちでわれわれに独自の状況や特徴に見合った部分を、適切な改変を加えつつ、慎重に導入することによって得られるのである。こうした仕方が実現しない限りわれわれは、海外の諸大学を全体的に模倣することで、必ずや失敗者となり嘲笑に身をさらすのがおちである。

[40] 不完全な教育を擁護して頻繁に出される弁明の一つは、十分に拡充された課程に要する時間がとれない、という主張である。すでに述べたように、十全な教育を四年間で開始し終了するのは不可能なことを、われわれはよく承知している。しかし、かりに二十一歳の直前の三年間を専門職向けの勉学に割り当てるとしても、この三年間に先立ち、学士課程用に規格化された教育課程に加えて、カレッジへの入学に現在必要な条件である学識の全てを得るに十分な時間がある。確かにカレッジへの入学年齢は十四歳以上と規定されているが、これより早い年齢で入学準備を完了してしまった若者が、規定の年齢まで待たされれば、「特にすることもなく、墮落の道を歩む危険がある」として、われわれはこの規定の緩和を実に頻繁に迫られるのである。初等学校や準備学校で新しく改良された教授法が生徒の早期の発達をもっと一層加速することになれば、上記のような弁明は更に強い熱意で主張されるであろう、とわれわれは予想するのである。

[41] しかし、仮に勉学を開始した時期が遅れた結果、学生の専門の職務への着任が少々先に延びたとして、これに伴う犠牲は不完全な教育と十全な教育の価値上の巨大な違いに比肩しうるものであろうか。若者が実業へと突き進むことが、彼の未来の安寧のためにそれほどまで不可欠であり、これを一年たりとも延期するくらいなら、優れた知的訓練および学識から生じる全ての長所など顧みない方がましだとでもいうのだろうか。

[42] この国の全人口が徹底した教育課程の恩恵に与れることから程遠い点を、われわれは熟知している。大部分の人々は、われわれの初等学校での大変限定された教育で我慢する他はない。別な人々は、アカデミーでのさらなる数カ月の特権をこれに加えることができるかも知れない。もっと高い目標と豊かな財源に恵まれた更に別な人々は、生徒ないし親が選択する特定の分野を教授する機関で二三年を過ごし、一部分のみの教育課程に出席することもできるであろう。

[43] となれば、次のような問いが提出されよう。すなわちカレジは、アカデミーの場合に見られる如く、あらゆる種類のクラスや学科を揃えるべきか、それともよく均整のとれた徹底した教育課程に自己限定すべきであるか。今や公衆は全ての人々に門戸が開かれるよう要求しているという。彼らは、教育が国家の急務や様々な人々の期待に対応できるよう修正され多様化されるべきこと、また商業、工業、農業に従事する予定の人々向けの教授内容が、それぞれの専門的な職業と密接に関連すべきことを要求しているのである。

[44] 全ての階級の若者たちに就学可能な、適切な教育課程があるべきだ、という公衆の要求は疑いもなく正しい。アカデミーを改善したり、商業学校、ギムナジウム、ライシウム、農業学校を設立するなど、こうした目的のために様々な用意ができる見込みのあることを、われわれは喜ばしく思う。しかしながら、公衆はどのカレジも高等学校やギムナジウム、ライシウムやアカデミーとなるように迫るのだろうか。われわれのカレジは、これらの価値ある教育機関と競合せねばならないのだろうか。カレジは、これら学校の仕事をその手から奪い取ろうと願うだろうか。カレジには自分に固有の目的があり、またこれら学校についても同様である。これら多様な学校全部を一つへ融合しようと試みることには、どんな利点があるのだろうか。われわれの学校やアカデミー、専門職向け学校のほとんど全てにおいて教育水準が拡充され引き上げられているとき、カレジはその水準を低下させるべきなのだろうか。われわれが過去三十年の間に懸命に努力して勝ち得た基盤を放棄

して、後退すべきだというのか。不完全な教育を求めるためカレジに入学する人々は、単にカレジの名称を自分たちの名前と結びつけたいために、また、過剰に教育されるという恐ろしい目に会うことなしに、カレジの卒業証書をさらってゆくために、そうするのではないか。もしカレジの学位が優れた教育の保証でないとしたら、カレジから出る学位の方が、アカデミーからの卒業証書より高い評価をうけるようなことがあるだろうか。もしある教育機関の教育課程が、他の機関の課程と同じレベルにまで低下したならば、どちらを卒業しても同等の名誉を得ることになるだろう。カレジとアカデミーの特徴的な違いは何であろうか。前者が後者よりも多くの分野を教えているということではない。合衆国には数多くのアカデミーが存在しており、それらの科目組織は、少なくとも文言上ではカレジのより一層多様である。しかし、アカデミーがあらゆる分野をわずかずつ教えるのに対し、カレジは一つの同一形態の課程へと努力を傾けることによって、その仕事を遥かに綿密かつ経済的に成し遂げることを目指している。それはちょうど、一種類だけの商品を扱う商人や、一種類だけの織物をおる工場主などが、数多くの対象に注意や技能を分散している者たちよりも、自分の仕事を一層完璧に成し遂げるのと同様である。

[45] もしわれわれの資金が溢れんばかりか、またもしわれわれに余剰資金があり、その結果、資金を使用するため何か新たな目的を探す必要があるのならば、短縮された促成の教育課程の学科を設けても、それが同一理事会の管理下にあるという点だけでカレジと結びついている限り、恐らく何の実害もないであろう。しかしこうした学科は、医学校や法学校の場合と同様に、四年制の学士課程からは一線を画すべきである。現在、イエール・カレジ固有の部門に割り当てられている全資金は、カレジ教育の目論見から判断すれば、ほとんど十分ではなく、むしろ明確に不足である。与えようと試みている教育を損なわずに、他の目的に資金、精神力、労働力の一部を割けるほどの余裕はわれわれにはない。ロンドン大学のように、数十万ドルの資本をもって設立され、百万以上の



人口をもつ大都会の若者たちに教育システムを用意することを目指した機関であれば、上級と下級課程、科学と実学の課程、専門職向け、商業、工業向け学校などを提供して当然であろう。けれども、基金からの年間の歳入が二三千ドルでしかないカレッジが、同時にロンドン大学のようなふりをしてよいものだろうか。われわれが万が一ロンドン大学のようになったとしても、それでも学士課程はなお、複雑に配列されたシステムの中で、一つの明確な部門を構成すべきなのである。

[46] しかし、カレッジを様々な階級の人々に近づきやすくして学生数を増やし、そのことをとおして、われわれは歳入を増加させることはできないものか。こうしたやり方は期限つきであり、短期間だけ有効であろう。すなわちカレッジの学位が、世間の与える評価において、現状の価値を維持できる間だけは有効である。この価値は、われわれが与える教育の特質に完全に依存している。しかしながら、カレッジが低い学識水準にまで凋落したことが判明するやいなや、その評判は相応しいレベルにまで下がる。カレッジが有名無実化して実際にはアカデミーと同等にまで成り下がれば、あるいはカレッジとアカデミーの半々の機関となれば、全国の遠隔の地の両親たちに、近隣に幾多のアカデミーがあるにもかかわらず、子弟をわざわざカレッジに入学させるよう一体どうやって説得できようか。法人格を付与されることには、教育水準を向上させ自ら尊敬を勝ち得ないような文芸機関に名声を与える、魔術的な力など何も無いのである。カレッジがその名誉ある教育水準を低下させたり、不完全な教育を徹底した教育に替えることによって、公的な信頼を失った場合、これまで高い期待と目的とによってカレッジに引き付けられていた人々が、カレッジを見捨てるようになると想定される。たとえ、直ちに学生数の減少に苦しむことはないとしても、学生の最上の部分が、志しと学識とがとが共に低い学生たちに、取って替えられるであろう。

[47] われわれが高尚な特質を維持しうる限りにおいては、学生数についての心配は無用である。特質なしに、学生数を維持しようとしても無駄で

ある。まず第一に学生数の獲得を考え、その上で特質は後で考えると言うのは、危険な実験である。

[48] 徹底した教育課程を提供するという目的を実行する上で重大な不完全のあることを、われわれは自覚している。この主題に関してこれまで述べた所見は、われわれが実際に達成したと公言している内容というよりも、むしろ成し遂げたいと願っている内容にかかわっている。数多くの悔りがたい困難は永久に立ちはだかることだろう。これらのうち主要な困難の一つは、準備不足の学生たちをカレッジに受け入れるようにという、われわれに対して非常にしばしばなされる要求である。両親たちは、適切な資格を欠くような状況へと押しやられることによって、子弟たちがどれほど気恥ずかしく傷ついているか、ほとんど気づいていないのである。かろうじて入学した者たちの中には、時折、同級生の間から脱落してゆくあれこれの学生たちがいる。四年間を通しての大きな困惑と屈辱との後に、カレッジでの在学から得た恩典のほぼ全てとして、ようやく学位だけは取得する学生がいる。他方、十分な準備を経てカレッジに入学していれば、同級生の間でも立派なランクに位置し、内容のある教育を得たであろう。

[49] われわれが戦う必要のあるもう一つの深刻な困難は、学生たちの一部がものの考え方につきあちこちから強い影響を受け、本能的な興味を感じないことや、強引な努力を継続的に要求されること、更には学生たちの志望する専門職の職務に直接関連しないこと、こうしたことの学習はいずれも何ら実践的な効用を有しない、と信じ込まされる点である。当然のことながら、彼らが学ぶ価値がないと思いついでいることについては、学生たちは無知のままである。われわれが憂慮するのは、学生たちばかりでなくその両親たちもまた、教育の内容よりも、教育と言う名称の方をこそしばしば切望する点なのである。

[50] 現在われわれが取り組んでいる諸問題は、教育上の多種類の流儀の統合を試みることによって、減少せずにむしろ増大するのではないかとわれわれは危惧している。われわれは他の諸カレッジに対して、採用すべきシステムを指図する意図

は毛頭ない。カレッジによれば不完全な教育課程を導入する、納得の行く十分な理由もあるのである。現時点において、アメリカの全てのカレッジが、高度で堅固な学識以下の何ものによっても満足しない学生たちで充満するほど、徹底した教育への需要が強い、とはわれわれは断言できない。しかし、さほど遠くない将来、アメリカの諸カレッジはこうした高度な基盤にまで昇りつめ、二流の教育については質の低い教育諸機関に一任することになると期待したい。

[51] もしもカレッジ間の競争が学生数をめぐるのではなく、卓越性を目指す競争であれば、またもしも各カレッジが、見せ掛けの外見の誇示ではなく、その教育の実質的な価値によって他の凌駕を目指すのであれば、競争の結果、文芸の支配力は増すであろう。他方、競争が単なる数の奪い合い、新入生をかき集めるために絶妙な方策を並べ立てるだけ、ということになれば、カレッジの学識水準は低下し続け、ついには一般のアカデミーの水準にまで落ち込むであろう。こうした低下と劣悪化の作用を放置しておくことは、健全な学問の支援者や守護者たちにふさわしいであろうか。われわれの国には、膨大な人数の者たちに対して、徹底した教育のための手段を供給するに十分な財源がある。と同時に、この国の若者たちは、不完全で皮相的な教育課程で満足してしまうよう誘導するような、特異な誘惑にさらされている。ヨーロッパでは、学者たちの間の競争は非常に激しく、並みの学識を備えただけの者たちには、成功はおぼつかない。しかし、ここ合衆国においては、事業の場は極めて広く、平凡な学問でさえも執拗に要望され、しかも裕福な生活に十分な報酬額をもたらす仕事は数も多く手に入れやすい。その結果、知識の蓄積も全く不十分な若者であっても、自信と、猛烈で活気溢れる気概さえ相当にあれば、自己宣伝に成功し仕事にありつけるのである。そうした若者は、公職へ導く階段を昇り、民衆の喝采を博することさえできるかも知れない。彼は自身の知的な卓越性でもって選挙民を啓蒙できないとしても、少なくとも学問的虚飾という金ピカで選挙民の注目を集めることだけはできよう。これこそ

わか仕立てで皮相な教育への誘惑である。合衆国には心もとなく、虚弱で、育ち損ないのポプラ樹木が満ちあふれている。われわれがもっと頻繁に出会いたいのは、大地にしっかりと根を張り、大空に向かってゆっくりと伸び、人々には有り難い枝葉を大きく広げ、年を重ねるごとに威厳も増し加わる堂々たるニレの方である。この世の中には、皮相な教育に時間と金銭とを浪費するほど先見の明のない無駄遣いはない。親が自分の息子に対しあくせく働いて、何ら実質的な価値のないものを獲得させるために、学資を送ることがしばしば起こる。実際には、あと少しの時間と費用とを惜しまなければ、文芸の卓越性と専門職業上の成功のための基礎を、効果的に築くことができたであろうにもかかわらずである。

[52] 国家に対するわれわれの義務が、徹底した教育の手段を準備する努力をわれわれに求める。皮相な学問に堅固なそれを替えることにより、アメリカほどその利益が深い影響を受ける国家は他にないであろう。知識の普通の諸分野があまねく行き渡っているため、文芸面で卓越しようとする者たちは、極めて高度な基盤にまで昇ることが必要である。そうした人々は、いわば周囲に連なる丘陵の高みを超えて聳え立つ位置を占めねばならない。かくも啓発された人口の中にあっては、教育を受けているといっても、馱馬車や蒸気船中での会話や、新聞、抜粋本の一二冊を読んで得ると変わらない視野しか得ていない程度の人物では、抜きん出た存在ではとてもありえないのである。

[53] 各種の学校やアカデミーの未曾有の増殖が進行しているアメリカでは、諸カレッジは文芸上の高度な卓越性を目指すべきである。カレッジと同様、諸学校やアカデミーにも改善の余地のあることは、誰もが認めている。徹底した教育を受けた人々がこの国にはほぼ皆無だとすると、いったい誰がこれら教育機関を改革し、われわれの教育諸システムに特質と風格とを与えるのだろうか。そうした改革の諸方策の広範な枠組みを整える者は、自身、業務の全領域を見渡すことを可能にする、卓越した位置を占めている必要がある。高等な教育諸機関での皮相な教育は、必ずや下級の教育諸機関に

影響を及ぼすであろう。源泉が浅く混濁していれば、四方への流れは豊かで澄んだものではない。諸学校と諸カレッジとは競合する関係にはない。一方の成功には、他方の繁栄が不可欠なのである。

[54] われわれの共和政体は、膨大な人々が徹底した教育の利点を享受することを、極めて重要とする。ヨーロッパ大陸では、政治生活の特定の部門を担う運命の少数者がそうした目的のための教育を受ける一方で、一般大衆は比較的無学のままで放置されている。しかし、資格ある者なら誰でも公職に就けるこの国では、高度な学識はいかなる階級の人々にも限定されてはならない。専門職をもつ紳士たちと同じく、商人たち、製造者たち、農民たちもわれわれの議会で議席を占めている。徹底した教育は、したがって、これら全ての階級に拡大されるべきである。彼らが、国家的な重要諸問題に正しい判断を下し、浮動票を投ずるといった、健全な審判者であるだけでは十分でない。彼らが他の人々の考え方に対して、知識の広さと雄弁の力が生み出す影響力を行使することこそが必要なのである。われわれの審議諸機関における演説は、一つの専門職に独占されてよいであろうか。もしも、物理的な作用や道具を支配する力をわれわれに与えるのが知識であるなら、道徳と政治機構の共同動作のコントロールをわれわれに可能にするのは、更に強い意味において知識なのである。

[55] 生産・流通にかかわる実業を目指す若者たちを、教育課程が特に彼らの仕事に適合していないという理由だけで、カレッジから閉め出すべきではない。この原則に従えば、専門職を目指す者たちも、同様に閉め出されてしまうだろう。どちらの場合でも、学士課程の目的は実業への準備を完了することではなく、いかなる職業をも改善し、高度化し、引き立たせるような、多様で一般的な知識を与えることなのである。商人たち、製造者たち、農民たちは、高度の知的教養からは何も利益を得ないと言えるだろうか。彼らこそは、その置かれた状況や実業のゆえに、科学の諸原理を彼らの実践的な応用へと還元する絶好の機会をもつ

階級なのである。わが国の繁栄の潮流が急速に蓄積しつつある膨大な富は、大部分こうした階級のものとなるだろう。こうした階級の人々が卓越した教育を受け、幅広くリベラルな視野をもち、堅固で優雅な学識を有することになれば、彼らは単なる資産の所有者としてより上等な地位へ昇ることができ、財産を死蔵したり無意味な贅沢に散財することもせず、自らの学識によって社会を引き立て、彼らの財産を、自己にとっては最高の名誉となり、国家にとっては最高に有益となる仕方で、用いることになるだろう。実に望ましいことではないか。

[56] この国の人口の積極的で企業的な特性は、そうした忙し気な動きと活力とを、深い思想と早期の陶冶の結果としての健全な知性によって導くことを極めて重要とする。行動への衝動の大きさに比例して、賢くたくみな指導の必要も大きくなる。船員のほとんどがマストに上って、帆を張り風をとらえようとしている時でも、誰か一人はしっかりと操舵している必要がある。軽量で並みの学問ではかくも領土が大きく、かくも知的で、かくも資源が豊富で、人口と国力と富の増加がかくも急速なこの国の諸活力を方向づけるには、全く適合していないかも知れない。自由な政体が人間の知性の拡大と活動とに完全な自由を与える所では、教育もそれに比例してリベラルで豊かでなければならぬ。われわれの山や河、湖でさえもが、偉大で強力な国家となるわれわれの運命を示すような規模であるとすれば、われわれの文芸がかくも弱体で、乏しく、皮相であってよいものだろうか。